



**讀方** 聖人の知は青天の日の如く、賢人は浮雲の天の日の如く、愚人は陰霾の天の日の如し。昏明同じからざるものありと雖も、其の能く黑白を辨ずるは則ち一なり。昏黑夜裏と雖も、亦影影黑白を見得。就ち是れ日の餘光未だ盡きざる處なり。困學の功夫、即ち亦只だ這點の明處より精察し去るのみ。

第七十四章 七情

問。知譬日。欲譬雲。雲雖能蔽日。亦是天之一氣。合有的。欲亦莫非人心合

**字解** 「七者俱是人心合有的」禮記に「人生れて靜なるは天の性なり。物に

感じて動くは性の慾なり。朱子曰く「その未だ物に感ぜざるときは、純粹至善にして、萬理をなほる。所謂性なり。物に感じて動くときは、性慾出で、善惡わち欲なり」。

〔方所〕 方位場所。〔指著〕 エビサシツク。〔色象〕 イロカタチ。〔簡易透徹〕 事スク、トホシ、ツラヌク。◎ 佐藤一齋曰ふ。七情、中和を得ば、則ち其の自然の流行に順ふ。以て良知の用を爲すに足れり。則ち和を失すれば、則ち過不及ありて偏す。以て良知の蔽となす。

有否。先生曰。喜怒哀懼愛惡欲。謂之七情。七者俱是人心合有的。但要認得良知明白。比如日光。亦不可指著方所。一隙通明。皆是日光所在。雖雲霧四塞。太虛中色象可辨。亦是日光不減處。不可以雲能蔽日。教天不要生雲。七情順其自然之流行。皆是良知用。不可分別善惡。但不可有所著。七情有著。俱謂之欲。俱爲良知之蔽。然纔有著時。良知亦自會覺。覺即蔽。

に足れり。故に中和の欲、之を公過といひ。無かるべからざる也。若あるの欲、之を私慾といふ。あるべからざる也。

◎吉村秋陽曰ふ。良知、其自然に順ひて、人心の用に達す。猶ほ雲氣の時、隨うて流行し、能く造化の功を濟す。如し七情、即ち良知の妙詮し得て、極めての妙。

去復其體矣。此處能勘得破。方是簡易透徹功夫。

讀方問ふ。知を日に譬ひ、欲を雲に譬ふ。雲能く日を蔽ふと雖も、亦是れ天の一氣合に有べき的。欲亦人心合に有べきに非るなきか否か。

先生曰く、喜怒哀懼愛惡欲、之を七情と謂ふ。七情の者、俱に是れ人心合に有べき的。但良知を認め得て、明白なるを要す。比へば日光の如し。亦方所を指著すべからず。一隙の通明、皆是れ日光の在る所、雲霧四塞すと雖も、太虚の中、色象

辨すべし。亦是れ日光滅せざる處、雲能く日を蔽ふを以て、天をして雲を生ずるを要せざらしむべからず。七情、其自自然の流行に順へば、皆是れ良知の用、善惡を分別すべからず。但著する所あるべからず。七情著するあれば、俱に之を欲と謂ふ。俱に良知の蔽を爲す。然れども、纔に著するあるときは、良知亦自ら覺ることを會す。覺れば、即ち蔽去りて、其體に復す。此處能く勘得し破るは、方に是れ簡易透徹の功夫。

第七十五章 父子訟獄

〔字解〕〔郷人〕先生の年譜に、正徳五年庚午、先生三十九歳、麻陵縣の知縣に陞り政を爲す。威刑を事とせず。たゞ人心を開導するを以て本と爲す。民皆勝氣鬱訟を悔ゆ。涕泣して謝るもあるに至ると、蓋し此事を言ふ。〔訟獄〕訴訟のことと争罪曰獄。争財曰訟。〔慟哭〕カナシミ、イタミテ、聲をあげてナゲクこと。〔柴鳴治〕陽明先生の門人なり。名號詳ならず。〔提孩〕チノミ子の時イダキ、カ、ヘルの孟子盡心上。一歳之童の註に「二三歳之間、知孩笑、可提抱者也」

郷人有父子訟獄。請訴於先生。侍者欲阻之。先生聽之。言不終辭。其父子相抱慟器而去。柴鳴治入問曰。先生何言致伊感悔之速。先生曰。舜是世間大不孝的。子瞽瞍是世間大慈的。父鳴治愕然請問。

〔讀方〕郷人に父子訟獄するわつて、訴を先生に請ふ。使者之を阻んと欲す。先生之が言を聽きて終に辭せず。其父子相抱て慟哭して去る。柴鳴治入りて問ひて曰く、先生何の言か伊が感

〔像貌〕ヨロコビ、マノシマス。〔瞽瞍底像〕『底像はヨロコビの心を致す也』○孟子離婁上に出づ。『舜盡事親之道、而』

悔を致すの速なる。先生曰く、舜は是れ世間大不孝的の子、瞽瞍は是れ世間大慈的の父と、鳴治愕然として請ひ問ふ。

先生曰。舜常自以爲大不孝。所以能孝。瞽瞍常自以爲大慈。所以不能慈。瞽瞍只記得舜是我提孩。長的今何不曾豫悅我。不知自心已爲後妻所移了。尙謂自家能慈。所以愈不能慈。舜只思父提孩我時如何愛我。今日不愛。只是我不能盡孝。日思所以不

能盡孝處所以愈能孝及至瞽瞍底  
 豫時又不過復得此心原慈的本體  
 所以後世稱舜是箇古今大孝的子  
 瞽瞍亦做成箇慈父

**讀方** 先生曰、舜は常に自ら以て大不孝となす。能く孝なる所以なり。瞽瞍は常に自ら以て大慈となす。慈なる能はざる所以なり。瞽瞍は只だ舜は是れ我が提孩し長ずるのを記し得。今何ぞ曾て我を豫悦せしめざると。自心已に後妻の爲に移され了るを知らず、尙ほ自家能く

慈なりと謂ふ。愈々慈なること能はざる所以。舜は只父の提孩する時、如何か我を愛せし。今日愛せざるは、只だ是れ我の孝を盡す能はざるを思ふ。愈々能く孝なる所以なり。瞽瞍を底す時に至るに及びて、又此心原と慈的本體に復し得るに過ぎず。後世舜は是れ箇の古今大孝的の子と稱し、瞽瞍も亦箇の慈父となることを做す所以なり。

第七十六章 一了百當

**字解** 「點化」己れの氣質の悪しき處を、ソコ、ココと注意し改むること。自家解化「自家は自己と同じ。解化は、トケカハル。」  
 「了百當」一箇處透り得ば、餘の百箇處皆當を得ること。「點化許多不得」學問に限りありて、あまたの氣質のあしきところを點化し得ざるをいふ。

**字解** 「過上用功」過あれば、斯くせばよかりしにと、後よりいろ／＼に心配すること。「瓶」瓶はコシキ也。破れたる瓶を

先生曰。學問也。要點化。但不如自家解化者。自一了百當。不然亦點化許多不得。

**讀方** 先生曰く、學問は也た點化することとを要す。但自家解化する者の自ら一了百當なるに如かず。然らざれば亦許多を點化し得ず。

第七十七章 改過

人有過多於過上用功。就是補甑。其流必歸於文過。

**讀方** 人過ちあれば多く過上に於て功を用ふ。

○ぎ合はして見ること。後漢の世、孟敏と杖頭に掛けて行けり。一日、誤つて其の瓶を地に落して破る。而れども之を顧みずして過ぐ。郭林宗見て大に感じ、故を問ふ。答へて曰く、既に破れたるを見るも、何の益かあらむと。林宗其の常人に非ざるを知り、すゝめて學ばしむ。孟敏、遂に天下の賢人となるといふ。

**字解** 「古人論性」孟子は、性を善なりとし、荀子は、性を惡なりとし、楊雄は、善惡混ずとし、韓愈は、三品ありとするなど、各々異なり。悉くは、孟子は、滕文

就ち是れ甑を補ふなり。其流や必ず過ちを文に歸す。

◎西郷南洲曰ふ。過ちを改むるに、自ら過てりとのみ思ひ付かば、それにて善し。其の事をば棄て、顧みず。直ちに一步を踏み出すべし。過を悔しく思ひ、取り繕はんとて、心配するは、譬へば、茶碗を割り、其の缺けを集め合せ見ると同じ事にて、詮もなきこと也。

第七十八章 章性無定體

問。古人論性。各有異同。何者乃爲定論。先生曰。性無定體。論亦無定體。有自本體上說者。有自發用上說者。有自源頭上說者。有自流弊處說者。總

公篇、荀子は性惡篇、楊雄は修身篇、韓子は原性を見るべし。發用上より發して外にあらはるゝ上より説くもの。二邊一善とか、惡とか、一偏一方にのみ説くべきにあらずとなり。

性之本体 原是無善無惡的

而言之。只是這箇性。但所見有淺深。爾若執定一邊便不是了。

讀方 問ふ。古人性を論ずる各異同あり。何物か乃ち定論となす。先生曰く、性に定體なく、論にも亦定體なし。本體上より説くものあり。發用上より説くものあり。源頭上より説くものあり。流弊の處より説くものあり。總べて之を言へば、只是れ這箇の性、但見る所に淺深ある爾。若し一邊を執定せば、便ち不是にし了る。性之本體原は無善無惡的。發用上

佐藤一齋曰く、性之本體、無善無惡、性之形而上を指して、善惡と名づけて、言ふ。至り、則ち已に形而下に落ち、故に無善無惡にして、即ち所謂善にして、而して物と對なし。是れ其の本體也。然らば、寂の說と同じか。視也。ウカッ。何

也。原是。可以爲善。可以爲不善的。其流蔽也。原是一定善。一定惡的。譬如眼。有喜時的。眼。有怒時的。眼。直視。就是看的。眼。微視。就是覷的。眼。總而言之。只是這箇眼。若見得怒時。眼。就說未嘗有喜的。眼。見得看時。眼。就說未嘗有覷的。眼。皆是執定。就知是錯。孟子說性。直從源頭上說來。亦是說箇大槩如此。荀子性惡之說。是從流弊上說來也。未可盡說他不是。只是見

得未精耳。衆人則失了心之本體。

**讀方** 性の本體原是善無き惡無し。發用上も也。原と是れ以て善を爲すべく。以て不善を爲べし。其流蔽も也。た原と一定の善、一定の惡。譬へば眼の如し。喜ぶ時の眼あり。怒時の眼あり。直視は是れ看る眼、微視は就ち是れ觀ふ眼。總て而して之を言へば、只だ是れ這箇の眼、若し怒る時の眼を見得て、就ち未だ嘗て喜ぶ眼ならずと説き、看る時の眼を見得て、就ち未だ嘗て觀ふ眼あらずと説かば、皆是れ執定、就ち是れ錯れ

るを知る。孟子性を説けるは、直に源頭上より説き來る。亦是れ箇の大概を説く此の如し。荀子性惡の説、是れ流弊上より説き來る。也。た未だ盡く他是ならずと説くべからず。只だ是れ見得て、未だ精しからざるのみ。衆人は則ち心の本體を失ひ了る。

問。孟子從源頭上説性、要人用功在源頭上。明徹荀子從流弊説性、功夫只在末流。救正便費力了。先生曰。然。

**讀方** 問ふ。孟子源頭上より性を説くは人の功



を用ゐる源頭上に在りて明徹せんことを要す。荀子流弊上より性を説くは功夫只末流に在りて救正す。便ち力を費し了る。先生曰く然り。

第七十九章 用功到精處

先生曰。用功到精處。愈著不得言語。說理愈難。若著意在精微上。全體功夫反蔽泥了。

讀方 先生曰く、功を用ゐる、精處に到れば、愈々言語を著くるを得ず。理を説く愈々難し。若し意を著けて精微上にあれば、全體の功夫反つて

〔精微上〕 理の精微の點にのみ、拘泥せば、全體の工夫、却りて乏れが爲めに障りなすとなす。〔蔽泥〕 オホハレ、ナツム。

生年譜に嘉靖六年五月十六日、都察院左都御史を兼ね、思田を征する。六月、疎命を辭す。壬午、越中を發す。〔思田〕 今の廣西、廣東の地なり。州のよ、峯、先、地、廣、州、の、御、史、姚、鏜、を、征、す。〔姚鏜〕 蘇、王、受、衆、を、構、へ、て、亂、を、な、す。思、恩、を、攻、め、て、之、を、踏、す。久、し、う、し、て、克、た、す。

蔽泥し了らん。

第八十章 四句訣

丁亥年九月。先生起復。征思田。將命行時。德洪與汝中論學。汝中舉先生教言曰。無善無惡是心體。有善有惡是意之動。知善知惡是良知。爲善去惡是格物。

讀方 丁亥の年九月、先生起復して思田を征す。將に行を命せんとする時に、徳洪汝中と學を論じ、汝中先生の教言を擧げて曰く、善なく悪なき

す。故に先生に出征の命ありし也。大學の心、意、格、致、に「教育」先生が致したる時、學者に教へたる。無善無惡心體の善惡は相對の名にして、善といへば惡あり。其の無善無惡をいふは、心の廓然太公未發の中、寂然不動なる状態、即ち其發動の前に過りて、本體を説けるものにして、固より善惡の形容を超越せるもの也。老子の美の美たるは、美にあらざるといへると同じ陽明先生は、又た善なく惡なき、之れを至替と謂ふとも曰へり而して其の一

は、是れ心の體。善あり惡あるは是れ意の動。善を知り惡を知るは是れ良知。善を爲し惡を去るは是れ格物と。

德洪曰。此意如何。汝中曰。此恐未是究竟話頭。若說心體是無善無惡亦是無善無惡的意。知亦是無善無惡的知物。是無善無惡的物矣。若說意有善惡。畢竟心體還有善惡在。

德洪曰。此意如何。汝中曰。此恐未是究竟話頭ならず。若し心體是れ善

たひ發動せるときは或は善あり或は惡あり。有善有惡是意動の心は活物なるが故に、萬事に感じて之れに應ずると鏡の物を照すが如し。此の心を感動するるとき、心必ず發動す。之れを意といふ。意のよき條理に従ひ、動きたるもの、之れを善といふ。否らざるもの、之れを惡といふ。所以に善あり、惡あるは意の動といふ。動とは心の體に對せしものにして、即ち心の用也。

なく惡なしと説けば、意も亦是れ善なく惡なき的の意。知も亦是れ善なく惡なき的の知。物も是れ善なく惡なき的の物なり。若し意に善惡ありと説かば、畢竟心體還善惡の在るあらん。

德洪曰。心體是天命性。原は無善惡的。但人有習心。意念上見有善惡在。格致誠正修此。正是復那性體功夫。若原無善惡。功夫亦不消說矣。

德洪曰。心體は是れ天命の性。原と是れ善なく惡なき的。但人習心有りて意念上に善

〔知善知惡是良知〕  
人は各天然自然に善  
良なる知を具ふ。心  
れを良知といふ。心  
の中の主宰となり、  
事物を見分け、知り  
分くる働きをなすも  
の善をいふ。此の良知  
は善惡を實して分明  
ならざることをなし、  
されば惡を爲すは、  
私欲に蔽はれて、良  
知に背ける也。之れ  
を自ら欺くといふ。

〔爲善去惡格物〕  
天下の事々物々に處  
するに、先づ心の本  
體、即ち良知に實し、  
善惡判然たるの後、  
爲善去惡を格物と  
す。物は事の意念  
にづく所の事物な  
り。格は正す也。其  
の不正を去りて、以て善  
の正をとり、以て善

悪の在るあることあるを見る。格致、誠、正、修は  
此れ正に是れ那の性體に歸る功夫。若し善惡  
なくんば、功夫亦説くことを消るす。

是夕侍坐天泉橋。各舉請正。先生曰。  
我今將行。正要爾們來講破此意。君  
之見正好相資爲用。不可各執一邊。  
我這裏接人。原有此二種利根之人。  
直從本體上悟入。人心本體原是明  
瑩。無滯的。是是箇未發之中。利根之  
人。一悟本體。即是功夫。人已內外一

をなし惡を去る。之  
を格物といふ。〔無  
◎佐藤一齋云。〕無  
善無惡。是心之體。  
心の本體。靈昭明覺、  
善惡の名を指すべき  
なし。即ち所謂至善  
なる者也。〔有善有  
惡。是意之動。〕意は  
本體を以て動くもの  
あり。過不及を以て  
動くものあるを謂  
ふ。本體を以て動く  
もの善となし、過  
不及を以て動くもの  
を惡と爲す。即ち所  
謂人心。惟れ危き者  
也。〔知善知惡是良知〕  
孰れか本體の善とな  
り執れか過不及の惡  
と爲るを謂ふ。吾心  
の靈、自ら之れを知  
る。即ち所謂靈昭明  
覺なるもの也。〔爲  
善去惡是格〕物の

齊俱透了。其次不免有習心在本體  
受蔽。故且教在意念上。實落爲善去  
惡功夫。熟後渣滓去得盡時。本體亦  
明盡了。汝中之見。是我這裏接利根  
人的。德洪之見。是我這裏爲其次立  
法的。二君相取爲用。則中人上下。皆  
可引入於道。若各執一邊。眼前便有  
失人。便於道體。各有未盡。

讀方 是の夕天泉橋に侍座して各舉げて正を請  
ふ。先生曰く、我れ今將に行んとす。正に爾們

善に即きて之れを爲し物の恐に即きて之れを去る便ち亦靈昭明なるもの爲す所なるをいふ也。四つ物の本と大學心意格物を釋く。其言簡切明白、學者をして受用し易からしむるのみ。龍谿を許すに至りては則ち蓋し姑く之れを勝披し、其の本體を悟るあるを取、而かも其の實は必ずしも過て高妙の妙となすを須ぬざる也。

〔究竟〕 極意のこと  
〔話頭〕 コトバと同じ  
〔習心〕 氣質、習慣によりて、クセつきし心。  
〔本源上〕 善なく、惡なき心の本體をいふ。

來りて此意を講破せんことを要す。二君の見正に相資て用を爲すに好し。各一邊を執るべからず。我れ這の裏人に接する、原と此の二種あり。利根の人は直に本源上より悟入す。人心の本體原と是れ明瑩にして滯りなき的。原と是れ箇の未發の中。利根の人は一たび本體を悟る。即ち是れ功夫。人己内外、一齊に俱に透り了る。其次は、習心の在る有りて、本體蔽を受くることを免れず。故に且く意念上に在りて、實落に善を爲し惡を去を教ふ。功夫熟して

〔人己内外〕 他人と、自身と、心と、身とをいふ。  
〔實落〕 實際。  
〔渣滓〕 カス。  
〔指點〕 ユピサシ、シメス。  
〔徹上徹下〕 上知、下愚、ウチトホス。  
〔承當〕 ヒキウケ、アタルこと。

後、渣滓去り得盡す時、本體亦明なり盡き了る。汝中の見は、是れ我が這の裏利根の人に接する。的徳洪の見は、是れ我が這の裏其次の爲めに法を立る。二君相取りて用を爲せば、則ち中人上下皆道に引き入るべし。若し各一邊を執れば、眼前便ち人を失ふことあらん。便ち道體に於て、各未だ盡さざることあらん。

既而曰。已後與朋友講學。切不可失了。我的宗旨。無善無惡。是心之體。有善有惡。是意之動。知善知惡。是良

知爲善去惡是格物。只依我這話頭。隨人指點自沒病痛。此原是徹上徹下功夫。利根之人世亦難遇。本體功夫。一悟盡透此顏子明道所不敢承當。豈可輕易望人。人有習心不教他在良知上實用爲善去惡功夫。實去懸空想箇本體。一切事爲俱不著實。不過養成一箇虛寂。此箇病痛不是小小不可不早說破。是日德洪汝中俱有省。

**讀方** 既にして曰く己後朋友と學を講ずる切に

我が宗旨を失ひ了るべからず。善なく悪なきは是れ心の體。善あり悪あるは是れ意の動。善を知り悪を知る者は是れ良知善を爲し悪を去るは是れ格物。只だ我が這の話頭に依り人に際て指點せば自ら病痛沒し。此れ原と是れ徹上徹下の功夫。利根の人は世亦遇ひがたし。本體功夫一悟して盡く透るは此れ顏子明道も敢て承當せざる所。豈輕易に人に望むべけんや。人習心あり。他をして良知上に在りて實に善

を爲し惡を去る功夫を用ゐしめず。只懸空に箇の本體を想ひ去りて、一切の事爲俱に實を著けずんば、一箇の虚寂を養成するに過ぎず。此れ箇の病痛是れ小小ならず。早く説破せざるべからずと。是の目徳洪汝中俱に省するあり。

四句訣

（三輪執齋四言教講義節錄）

〔無善無惡是心之體〕 人心善惡の二途ありといへども、そは動き出づる時の事なり。り動くは氣によるが故なり。其動かざる時は一の明のみ。此心の本體は、即ち人心に宿れる天神なり。此光明人の意念にわたらず。自然に是非を照らす。是れを良知といふ。夫れ耳に五音なき

は、耳の本體なり。夫れ唯た五音なし。故によく五音を聞いて違ふことなし。若し常に一音もあれば、五音皆違ふ。故に五音なきを耳の至善とす。口も亦味なきは、口の本體なり。夫れ唯だ五味なし。故によく五味を分ちて違ふことなし。若し一味もすれば、五味ともに違ふ。故に五味なきを口の至善とす。心に善惡なきは、心の本體なり。夫れ唯善惡なし。故によく善惡を辨へて、各誤ることなし。若し之れある時は、善惡ともに違ふ。故に善惡なきを心の至善とす。故に至善は心の本體なりとも云へり。

〔有善有惡意之動〕 天下の事々物々の理を外に窮めたりとも、我心の起る所誠ならずば、窮め得て却て害あるべし。人心元來至善なりといへども、血氣の生々止まることなければ、必ず動かすといふことなし。其動くを意といふ意のある所、千緒萬端といへども、つゞまる所、善惡の二途に洩るゝことなし。只自反の功、間斷あれば、過惡を

念慮の間に分つこと能はずして、長じて後事業にあらはれて、其害あるに至りては、良知に照して、はづかしくなれども、如何ともすべからざれば、俄に驚いて、其不善を捨うて其害をあらはさざらんか。是れ常人の常態なり。然るに終に捨ふこと能はざれば、復た何の益あらんか。故に戒懼の功懈らすして、獨を愼しむ。是れ先聖の學脈なり。假令一念の場をとりはづして、事業の上にあらばれたるも、此一念の場へ引かへして、初念の所に立かへり、悔悟し改むるは、誠意の工夫なり。一念の界つゝしまんずんばあるべからず。

〔知善知惡是良知〕 學ぶもの、格物の段に於て、覺悟を定めて善は生命にかへてなさん、惡は骨を粉にすとも去らんと、十分に思ひ入りたる上は、十の内、七八迄は進むべし。然れども其知れる所、必ず良知より出づるにあらざれば、其善なりと思ふことに、惡なることありて、其惡なりと思ふ事に惡ならざるもあるべし。夫れ良知は心の光なり。

善惡を照すこと。白日の黑白を分つが如し。良知は本體のまゝにして、人爲にわたらざるもの也。孺子の井に入るを見て、怵惕惻隱するが如きは、人爲にわたらず。天命の性より直に發出するものなり。是れを良知といふ。此の良知より出でたる善を至善といふ。眞知といふも是れ也。

〔爲善去惡是格物〕 夫れ學問は、惡人を免れて、善人とならんと欲するが爲めならずや。善人の至極は堯舜にもすゝむべし。惡人の至極は桀紂にも陥るべし。其界は一念の間にあり。善人にならんと願はゞ善をなすべし。惡人を免れんとなれば惡を去るべし。惡を去るを不正をたゞすといひ、善をなすを正しきにかへるといふ。不正を去つて正にかへる。是れを物を格すといふ。是れ聖門最初の手を下すの功にして、聖となるに至るまで、外に待つことなき也。人此處に於て、丈夫に志を立てざれば、萬事皆成ること無し。室を造るに基なきが如し。夫れ

物を格すと云ふこと、世間外人は物を格すにあらず。唯だ我心の物を格す也。身に顯はるゝ善惡は、皆心より出づれば、先づ一念の起るところ、いかんと察すべし。故に自反して、慎獨の切を立つといふ。一言一行までも、其本體のまゝの善心起り出づれば、尊心して當下に是を爲し、若し本體に背きて悪しき心起り出づれば、恥ぢ悔いて當下に是を去る。一時此くの如くすれば、一刻聖人の地に進み、一刻此くの如くすれば、一刻聖人の地にいたる。是れ即ち人皆以て、堯舜となるべきの道、皇天の御心にして、聖人道統の學術なり。何の疑ふべきことかあらん。其善を爲し、其惡を去るに當りしは、生命をも顧みるべからず。是れを身を殺して仁をなすといひ、是れを生を捨て義を取るといふ。是れを知るを止まるを知るといひ。是れを得るを、道を聞くといひて、夕に死すとも可なりと喜ぶ。此くの如く丈夫に志を立て、自ら己れが本心に誓ふを、門に入るの始とす。

〔先儒〕程伊川、朱子を指す。格天下之物、天下の事々物々の理に窮め格るとなせるをいふ。朱子の補傳に曰ふ、大學之始教、必使學者即凡天下之物、莫不因其已知之理、益窮之以求至乎其極。〔二草一木〕近思錄に「程子曰。求之性情。固切於身。然一不可不察。」

第八十一章 章人皆可以爲堯舜

先生曰。先儒解格物爲格天下之物。天下之物。如何格得。且謂一草一木亦皆有理。今如何去格。縱格得草木來。如何反來誠得自家意。我解格作正字義。物作事字義。大學之所謂身。即耳目口鼻四肢是也。欲脩身便是要目非禮勿視。耳非禮勿聽。口非禮勿言。四肢非禮勿動。要修這箇身。身上如何用得功夫。心者身之主宰。目雖



【體當】體  
 認承當の義。身に引  
 き當てゝみることに  
 【廓然大公】カラリ  
 として清く朗らに  
 ゴクオホヤケにして  
 私なきこと。  
 【察】 發心、穴發の  
 こと。  
 【實實落落】 眞實に  
 といふこと。

視。而。所以。視。者。心。也。耳。雖。聽。而。所以。聽。者。心。也。口。與。四。肢。雖。言。動。而。所以。言。動。者。心。也。故。欲。修。身。在。於。體。當。自。家。心。體。常。令。廓。然。大。公。無。有。些。子。不。正。處。主。宰。一。正。則。發。竅。于。目。自。無。非。禮。之。視。發。竅。于。耳。自。無。非。禮。之。聽。發。竅。于。口。與。四。肢。自。無。非。禮。之。言。動。此。便。是。修。身。在。正。其。心。然。至。善。者。心。之。本。體。也。心。本。體。那。有。不。善。如。今。要。正。心。本。體。上。何。處。用。得。工。必。就。心。之。發。

【著落】 落  
 着する。こと也。  
 【所謂人雖不知大  
 學誠意の章、慎獨を  
 解せる也。朱子の註  
 に「獨者。人所不知  
 地。而已所獨知之  
 地」とあり。

動。處。纔。可。著。力。心。之。發。動。不。能。無。不。善。故。須。就。此。處。著。力。便。是。在。誠。意。如。一。念。發。在。好。善。上。便。實。實。落。落。去。好。善。一。念。發。在。好。善。上。便。實。實。落。落。去。好。善。意。之。所。發。既。無。不。誠。則。其。體。如。何。有。不。正。的。故。欲。正。其。心。在。誠。意。工。夫。到。誠。意。始。有。著。落。處。然。誠。意。之。本。又。在。于。致。知。也。所。謂。人。雖。不。知。而。已。所。獨。知。者。此。正。是。吾。心。良。知。處。然。知。得。善。卻。不。依。這。箇。良。知。便。做。去。知。得。

不善。卻不依這箇良知。便不去做。則這箇良知。便遮蔽了。是不能致知也。

讀方 先生曰。先儒格物を解きて。天下の物に格ると爲す。天下の物。如何ぞ格り得ん。且つ謂く。一草一本も亦皆理ありと。今如何ぞ格り去らん。縦へ草木に格り得來るとも。如何ぞ反し來りて自家の意を誠にし得ん。我れ格を解して。正字の義となし物を事の字義と作す。大學の所謂る身は。即ち耳目口鼻四肢是れなり。身を脩めんと欲せば。便ち是れ目禮に非ば。視る勿

く。耳禮に非ざれば。聽く勿く。口禮に非ざれば。言ふ勿く。四肢禮に非ざれば。動き勿しを要す。這箇の身を修めんことを要せば。身上如何ぞ功夫を用ゐ得ん。心は身の主宰。目視ると雖も。而れども。視る所以の者は心なり。耳聽と雖も。而れども。聽く所以の者は心なり。口四肢と言ひ動く。雖も。而れども。言ひ動く所以の者は心なり。故に身を修めんと欲せば。自家の心體を體當して。常に廓然大公。些子の正からざる處あるなからしむるにあり。主宰一たび正ければ。則ち竅を

身みに發はつして自おのづから非ひ禮れいの視しなく、竅けうを耳みに發はつして自おのづから非ひ禮れいの聽ていなく、竅けうを口くちに發はつして、四肢しと與ともに、自おのづから非ひ禮れいの言げん動どうなし。此これ便すなはち是これ身みを修おさむるは、其その心こころを正たしするにあり。然しかり至し善せん者は心こころの本ほん體たいなり。心こころの本ほん體たい、那なんぞ不ふ善せんあらん。如い今ま心こころを正たしうせんことを要えうせば、本ほん體たい上じやう、何いづ處くにか、工こうを用もち得えん。必かならず心こころの發はつ動どうの處ところに就つきて、纔わづかに力ちからを著つくべし。心こころの發はつ動どう、不ふ善せんなきこと能あたはず。故ゆゑに須すべから此この處ところに就つきて力ちからを著つくべし。便すなはち是これ意いを誠まことにするに在あり。一いち念ねん意せんを好このむ上うへに發はつ

在ざいするが如ごとき、便すなはち實じつ實じつ落らく落らく、善ぜんを好このみ去さり、一いち念ねん惡あくを惡にくむ上うへに發はつ在ざいすれば、便すなはち實じつ實じつ落らく落らく、惡あくを惡にくみ去さり、意いの發はつする所ところ、既すでに誠まことならざる無なければ、則すなはち其その體たい如い何かんぞ正たししからざる的ものあらん。故ゆゑに其その心こころを正たしうせん、と欲ほつすれば、意いを誠まことにするに在あり。工く夫ふう誠せい意いに到いたりて、始はじめて著ちやく落らくの處ところあり。然しかるに誠せい意いの本もと、又また知ちを致いたすに在あり。所い謂ゆる人ひと知しらずと雖いへども、而しかども己おのれ獨ひとり知しる所ところの者ものは、此これ正まさに是これ吾わが心こころの良りやう知ちの處ところ、然しかるに善ぜんを知しり得えて却かへつて、這しや箇この良りやう知ちに依よつて、便すなはち做なし去さらす。

不善を知り得て却て這箇の良知に依りて便ち  
做し去らざるあれば則ち這箇の良知便ち遮蔽  
し了る。是れ知を致す能はざるなり。

字解 「懸空」  
ツとして、とりとめ  
なきと  
（送件事上）前の  
其の善と見る事物上  
に就きてをいふ。物上  
のは其の悪と見る。後  
物上につきてをいふ。

吾心良知既不能擴充到底則善雖  
知好不能著實好了惡雖知惡不能  
著實惡了如何得意誠故致知者意  
誠之本也然亦不是懸空的致知  
知在實事上格如意在于去惡為善  
這件事上去為意在去惡為善便就  
件事上去不為去惡固是格不正以

字解 「人皆云々」  
孟子告子下に「曹  
交問曰人皆可ニ以  
為堯舜有諸孟子  
曰然云々」

歸於正為善則不善正了亦是格不  
正以歸於正也如此則吾心良知無  
私欲蔽了得以致其極而意之所發  
好善去惡無有不誠矣誠意工夫實  
下手處在格物也若如此格物人人  
便做得人皆可以為堯舜正在此也。

讀方 吾が心の良知既に擴充到底する能はざれ  
ば則ち善好むを知ると雖も著實に好み了るこ  
と能はず。惡惡むを知ると雖も著實に惡み了

ること能はず。如何ぞ意の誠なるを得ん。故  
 に知を致すは意誠なるの本なり。然るに亦是  
 れ懸空的に知を致すにあらずして、知を致すこ  
 と實事上に在りて格す。意善を爲すに在るが  
 如きは、便ち這の件の事上に就きて爲し去る。  
 意惡を去るに在れば、便ち這件の事上に就きて、  
 爲さざるを去る。惡を去れば固より是れ正し  
 からざるを格して以て正に歸す。善を爲せば  
 則ち不善正し了る。亦是れ正しからざるを格  
 して以て正に歸するなり。此の如くすれば、則

ち吾が心の良知私欲の蔽なくして了り、以て其  
 極を致すことを得て而して意の發する所善を  
 好み惡を去り、誠ならざることあるなし。意を  
 誠にするの工夫、實に手を下す處物を格すに在  
 り。若し此の如く物を格すは、人人便ち做し得  
 り。人皆以て堯舜たるべきこと、正にこゝに在るな  
 り。

第八十二章 聖人可到

先生曰。衆人只說格物要依晦翁何

〔晦翁〕朱子のこと、晩に晦翁と稱す。  
 〔他〕的。晦翁を指す。  
 〔初年〕竹なり。子。  
 〔竹〕子。意味なし。  
 〔早夜〕朝、晩。  
 〔在夷中三年〕先。  
 〔生の龍場驛に謫せられたる時をいふ。〕  
 〔擔當〕自己のものに引受けて事をなすこと。  
 〔知道〕知らせること。

曾把他的說去用。我著實曾用來。初年與錢友同論做聖賢。要格天下之物。如今安得這等大力量。因指亭前竹子。令去格看。錢子早夜去窮格。竹子的道理。竭其心思。至於三日。便致勞神成疾。當初說他這是精力不足。某因自去窮格。早夜不得其理。到七日。亦以勞思致疾。遂相與嘆聖賢是做不得的。無他。大力量去格物了。及在夷中三年。頗見得此意思。乃知

天下之物。本無可格者。其格物之功。只在身心上做。決然以聖人爲人人可到。便自有擔當了。這裏意思。卻要說與諸公知道。

〔讀方〕先生曰く、衆人只格物を説くに、晦翁に依らんことを要む。何ぞ曾て他的の説を把り用ゐ去らん。我れ著實に曾て用ゐ來る。初年錢友と同く聖賢と做るを論じて、天下の物に格らんとことを要む。如今安ぞ這等大なる的の力量を得ん。因りて亭前の竹子を指し格り去り着しむ。

錢子早夜竹子的道理を窮格し去り、其心思を竭し、三日に至り、便ち神を勞し疾を成すを致す。當初説く他、這は是れ精力足らずと。某因りて自ら窮格し去り、早夜其理を得ず。七日に到りて亦思を勞するを以て疾を致す。遂に相與に嘆す。聖賢は是れ做し得ざる、他の大量の物に格り去ることなくして了ると。夷中に在る三年に及んで頗る此意思を見得たり。乃ち知る天下の物本格るべき者なし。其格物の功、只身心上に在りて做すと。決然として聖人を

「知之匪難、行の惟難」

以て人人到るべしとなし、便ち自ら擔當し了ることあり。這裏の意思却て諸公に説與して知道せしめんことを要す。

第八十三章 行の惟難

或疑知行不合一以知之匪艱二句爲問。先生曰良知自知原是容易的。只是不能致那良知便是知之匪難行之惟難。

讀方 或ひと知行合一ならざるを疑ひ、知るの艱にわらずの二句を以て問を爲す。先生曰く良

知自ら知ることを原と是れ容易的只是れ那良知を致すこと能はず。便ち是れ之を知るの難きに匪ず。之を行ふ惟れ艱し。

第八十四章 尊德性而道問學

以方問尊德性一條先生曰道問學即所以尊德性也。晦翁言子靜以尊德性誨人。某教人豈不是道問學處。多了這子是分尊德性道問學作兩件。且如今講習討論下許多工夫。無非只是存此心不失其德性而已。

中庸第二十八章にあり尊德性而道問學。致廣大而盡精微。極高明而道中庸。溫故而知新。敦厚以崇禮。朱註に曰く、德性は吾の正理に受くる所以の正理道は由る也。晦翁言朱子文集答項平甫書に太挺子思以來教人之法。惟以下尊德性。

道問學二事。爲之用。力之要。今子靜所說。專是尊德性。却事而忘問學。多持守。可觀。而看。得義理。全不。子細。又別說。一種。杜撰。道理。却於。緊要。爲。己。爲。人。上。多。不。得。力。今。當。反。身。用。力。去。短。集。長。庶。幾。不。墜。一邊。耳。

尊德性只空空去尊更不去問學。問學只是空空去問學。更與德性無關。涉如此則不知。今之所以講習討論者。更學何事。問致廣大二句。曰盡精微。即所以致廣大也。道中庸即所以極高明也。蓋心之本體。自是廣大。底人不能盡精微。則爲私欲所蔽。有不勝其小者矣。故能細微曲折。無所不盡。則私意不足以蔽之。自無許多障礙。遮隔處如何廣大不致。又曰精微。



還是念慮之精微。是事理精微。曰念慮之精微。即事理之精微也。

**讀方** 先生曰、問學に道るとは、即ち徳性を尊ぶ所以なり。晦翁言ふ。子静徳性を尊ぶを以て人に誨ふと、某人を教ふる豈是れ問學に道る處些子を多くし了らずやと、是れ徳性を尊び、問學に道るを分て兩件と作す。且つ如今講習討論許多の工夫を下すは、只だ是れ此心を存し、其徳性を失はざるに非るなきのみ。豈徳性を尊ぶは只空空尊び去りて、更に問學を去らず。問學

は只だ是れ空空に問學し去りて、更に徳性と關涉なきこと有らんや、此の如くなれば、則ち知らず、今の講習討論する所以の者は、更に何事をか學ぶを。廣大を致す二句を問ふ。曰く、精微を盡すは、即ち廣大を致す所以なり。中庸に道るは、即ち高明を極むる所以なり。蓋し心の本體自ら是れ廣大底。人精微を盡す能はざれば、則ち私欲の爲めに蔽はれ、其小に勝へざる者あり。故に能く細微曲折盡さる所無ければ、則ち私意以て之れを蔽ふに足らず。自ら許多の障礙

遮隔の處なし。如何ぞ廣大致さゝらん。又問  
ふ、精微は還て是れ念慮の精微か、是れ事理の精  
微か、曰く、念慮の精微は、即ち事理の精微なり。

第八十五章 天則流行

問。聲色貨利。恐良知亦不能無。先生  
曰。固然。但初學用功。卻須掃除蕩滌  
勿使留積。則適然來遇。始不爲累。自  
然須而應之。良知只在聲色貨利上  
用功能。致得良知。精精明明。毫髮無  
是。則聲色貨利之交。無非天則流行。

【字解】「聲色貨利」  
美聲。美色。金銀。  
財貨。  
【掃除蕩滌】ハラフ  
、ノヅク、ソ、グ、  
アリフ、總べて除き  
去るをいふ。  
【累】ワヅラヒ障り  
をなすものをいふ。  
【精精明明】極めて清  
く明らなること。  
【天則】天理と同じ。  
◎佐藤二齋云。苟くも  
能く良知を致せば、  
則好惡其正を得て、

矣。

是非其當を失はざる  
也。故に聲色貨利に  
遇ふとも順應あり。  
誘ふなし。愚管て曰  
く、古人言ふ外物累  
を爲す。豈能く累を  
問の爲す乎。蓋我自  
累する也。此條問  
答、意亦此と相契す。

問。先生曰く、固より然り。但初學功を

はざらん。先生曰く、固より然り。但初學功を  
用ゐる、卻て須く掃除蕩滌留積せしむることな  
かるべし。即ち適然として來遇すとも、始めよ  
り累を爲さず。自然に順うて而して之に應ず。  
良知只だ聲色貨利上に在りて功を用ゐ、能く良  
知を致し得て、精精明明、毫髮も蔽なければ、則聲  
色貨利の交る、天則の流行に非るとなからん。

第八十六章 長進一番

先生曰。吾與諸公。講致知格物。日日  
 是此講。一二十年。俱是如此。諸君聽  
 吾言。見吾講。一番自覺長進。一番否  
 則只作一場話說。雖聽之。亦何用。

**讀方** 先生曰く、吾れ諸公と、致知格物を講ず。日  
 日は此の講、一二十年、俱に是れ此の如し。諸  
 君吾が言を聴き、吾が講一番を見て、自ら長進一  
 番を覺えん。否されば則ち只一場の話說を作  
 すのみ。之を聴くと雖も、亦何の用かあらん。

第八十七章 鳶飛魚躍

**字解** 〔先儒〕程  
 明道の語。中府第  
 〔鳶飛魚躍〕詩曰。其上下察  
 也。行して天地の  
 化育流行して上下の  
 著なる、理の用にあ  
 らざるなきをいふ。  
 〔必有〕事焉。この  
 心の常にしまりある  
 ないふ。

問。先儒謂。鳶飛魚躍。與必有事焉。同  
 一活潑地。先生曰。亦是天地間活潑  
 潑地。無非此理。便是吾良知的流行  
 不息。致良知便是必有事的工夫。此  
 理非惟不可離。更亦不得而離也。無  
 往而非道。無往而非工夫。

**讀方** 問ふ。先儒謂く、鳶飛び魚躍る、必ず事あり  
 と、同一に活潑潑地と、先生曰く、亦是れ天地の間  
 活潑潑地。此理に非ざることなし。便ち是れ吾  
 が良知的流行して息まず。良知を致せば、便ち

是れ必ず事ある<sup>こと</sup>的<sup>た</sup>の工夫<sup>くわう</sup>此理<sup>このり</sup>惟<sup>ただ</sup>離<sup>はな</sup>るべからざるのみにあらず實<sup>じつ</sup>に亦<sup>また</sup>得<sup>え</sup>て而<sup>しかう</sup>して離<sup>はな</sup>れざる也。往<sup>ゆ</sup>くとして而<sup>しか</sup>して道<sup>みち</sup>に非<sup>あら</sup>ることなく往<sup>ゆ</sup>くとして而<sup>しか</sup>して工夫<sup>くわう</sup>に非<sup>あら</sup>ることなし。

### 第八十八章 一棒一條痕

先生曰諸公在此務要立箇必爲聖  
人之心時時刻刻須是一棒一條痕  
一擱一掌血方能聽吾說句句得力  
若茫茫蕩蕩度日譬一塊死肉打也  
不知得痛癢恐終不濟事回家只尋

〔一擱一掌血〕一棒一條痕にて打ちて一スガの痕を生ずること。  
〔一擱一掌血〕一擱一掌血にて打ちて血の出でシて流るゝこと、痛む中はその事を忘れざる如く、一切に省察を驗するをいふ。ホンヤ作々蕩々

### 得舊時伎倆而已。豈不惜哉。

〔讀方〕先生曰く、諸公此に在りて、務て箇の必ず聖人と爲るの心を立んことを要す。時時刻刻須

く是れ一棒一條の痕、一擱一掌の血なるべし。方に能く吾が説を聽きて、句句力を得ん。若し茫茫蕩蕩として日を度らば、譬へば一塊の死肉の打すとも痛癢を知得ず。恐くは終に事を濟ざらん。家に回りて只だ舊時の伎倆を尋ね得んのみ。豈惜まざらん哉。

### 第八十九章 立命功夫

〔痛癢〕イタミ。  
〔伎倆〕舊功と同じ。

字解 (立命) 孟子  
于盡心に「修身以  
之。所以立命也。

一友自嘆私意萌時。分明自心知得。只是不能便他即去。先生曰。爾萌時。這一知處。便是爾的命根。當下即去。消磨。便是立命功夫。

讀方 一友自ら嘆ず。私意萌す時、分明に自心知り得、只だ是れ他をして即ち去らしむる能はずと。先生曰く、爾萌す時、この知る處便ち是れ爾的命根、當下に即ち消磨し去る。便ち是れ命を立つる功夫。

第九十章 昏天黑地

先生嘗語學者曰。心體上著不得一念留滯。就如眼著不得些子塵沙。些子能得幾多。滿眼便昏天黑地了。又曰。這一念不但私念。便好的念頭。亦著不得些子。如眼中放此金玉屑。眼亦開不得了。

讀方 先生嘗て學者に語て曰く、心體上一念の留滯を著け得ざるは、就ち眼些子の塵沙を著け得ざるか如し。些子能く幾多を得ば、滿眼便ち昏天黑地にし了る。又曰く、この一念但是れ私念の

みならず。便ち好<sup>すなは</sup>的<sup>こうてき</sup>の念<sup>ねん</sup>頭<sup>とう</sup>も亦<sup>また</sup>些<sup>せ</sup>子<sup>し</sup>を著<sup>つ</sup>け得<sup>え</sup>ず。眼<sup>がん</sup>中<sup>ちゆう</sup>此<sup>こ</sup>の金<sup>きん</sup>玉<sup>ぎよく</sup>屑<sup>せつ</sup>を放<sup>はな</sup>つが如<sup>ごと</sup>し。眼<sup>まなこ</sup>亦<sup>また</sup>開<sup>ひら</sup>き得<sup>え</sup>ずして了<sup>は</sup>る。

第九十一章 傲者衆惡之魁

先生曰。人生大病。只是一傲字。爲<sup>レ</sup>子<sup>ト</sup>而<sup>レ</sup>傲<sup>レ</sup>必<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>孝<sup>ニ</sup>。爲<sup>レ</sup>臣<sup>ト</sup>而<sup>レ</sup>傲<sup>レ</sup>必<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>忠<sup>ニ</sup>。爲<sup>レ</sup>父<sup>ト</sup>而<sup>レ</sup>傲<sup>レ</sup>必<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>慈<sup>ニ</sup>。爲<sup>レ</sup>友<sup>ト</sup>而<sup>レ</sup>傲<sup>レ</sup>必<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>信<sup>ニ</sup>。故<sup>ニ</sup>象<sup>ト</sup>與<sup>レ</sup>丹<sup>ト</sup>朱<sup>ト</sup>俱<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>肖<sup>ナルモ</sup>。亦<sup>モ</sup>只<sup>モ</sup>一<sup>ニ</sup>傲<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>。便<sup>チ</sup>結<sup>ス</sup>果<sup>シ</sup>了<sup>ス</sup>此<sup>ノ</sup>生<sup>ヲ</sup>。諸<sup>レ</sup>君<sup>ト</sup>常<sup>ニ</sup>要<sup>ス</sup>體<sup>セン</sup>此<sup>ノ</sup>心<sup>ヲ</sup>。本<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>天<sup>ノ</sup>然<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>理<sup>ニ</sup>。精<sup>ニ</sup>精<sup>ニ</sup>明<sup>ニ</sup>明<sup>ニ</sup>。無<sup>シ</sup>纖<sup>シ</sup>介<sup>シ</sup>染<sup>ス</sup>著<sup>スル</sup>。只<sup>モ</sup>是<sup>レ</sup>。

【字解】「傲」ナゴル。正顔に「慢也」。尙書益稷に「若丹朱傲」。禮の曲禮に「傲不可長」。象與丹朱俱不肖。象は舜の弟。丹朱は堯の子。孟子萬章上に「丹朱之不肖。舜之子亦不肖」。書の益稷に「丹朱傲惟慢遊是好」。傲は作慢々象の傲りは堯典に見ゆ。一生を終は【結果】

一。無<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>已<sup>ニ</sup>。曾<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>切<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>ルハ</sup>有<sup>ル</sup>即<sup>チ</sup>傲<sup>ス</sup>也。古<sup>ク</sup>先<sup>ニ</sup>聖<sup>ニ</sup>人<sup>ト</sup>許<sup>ス</sup>多<sup>ク</sup>好<sup>ム</sup>處<sup>モ</sup>也。只<sup>モ</sup>是<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>已<sup>ニ</sup>。無<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>自<sup>ラ</sup>能<sup>ク</sup>謙<sup>ル</sup>。謙<sup>ム</sup>者<sup>ハ</sup>衆<sup>ノ</sup>善<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>基<sup>ニ</sup>。傲<sup>ム</sup>者<sup>ハ</sup>衆<sup>ノ</sup>惡<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>魁<sup>ニ</sup>。

【織芥】スゴシ【染着】ソマリツク。【無我】論語に曰ふ「無意無必無固無每無我」。【謙】ヘリクダレ。【增進】致<sup>ス</sup>恭<sup>ス</sup>也。不<sup>レ</sup>自<sup>ラ</sup>滿<sup>ル</sup>也。釋文に卑退<sup>ス</sup>爲<sup>ス</sup>義<sup>也</sup>。風<sup>レ</sup>已<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>物<sup>也</sup>。

【讀方】先生曰く、人生の大<sup>たい</sup>病<sup>びやう</sup>、只<sup>ただ</sup>是<sup>こ</sup>れ一<sup>いつ</sup>の傲<sup>がう</sup>の字<sup>じ</sup>。

子<sup>こ</sup>と爲<sup>な</sup>りて而<sup>しかう</sup>して傲<sup>ほこ</sup>れば必<sup>かなら</sup>ず不<sup>ふ</sup>孝<sup>かう</sup>に、臣<sup>しん</sup>と爲<sup>な</sup>て而<sup>しかう</sup>して傲<sup>ほこ</sup>れば必<sup>かなら</sup>ず不<sup>ふ</sup>慈<sup>じ</sup>に、友<sup>とも</sup>と爲<sup>な</sup>て而<sup>しかう</sup>して傲<sup>ほこ</sup>れば必<sup>かなら</sup>ず不<sup>ふ</sup>忠<sup>ちゆう</sup>に、父<sup>ちち</sup>と爲<sup>な</sup>て而<sup>しかう</sup>して傲<sup>ほこ</sup>れば必<sup>かなら</sup>ず不<sup>ふ</sup>信<sup>しん</sup>なり。故<sup>ゆゑ</sup>に象<sup>しやう</sup>と丹<sup>たん</sup>朱<sup>しゆ</sup>と俱<sup>とも</sup>に不<sup>ふ</sup>肖<sup>しやう</sup>なるも、亦<sup>また</sup>只<sup>ただ</sup>一<sup>いつ</sup>の傲<sup>がう</sup>の字<sup>じ</sup>、便<sup>すなは</sup>ち此<sup>こ</sup>生<sup>せい</sup>を結<sup>けつ</sup>果<sup>くわ</sup>し了<sup>は</sup>る。諸<sup>しよ</sup>君<sup>くん</sup>常<sup>つね</sup>に

此を體せんことを要す。人心本と是れ天然の理、精精明明、纖芥の染着するなし。只是れ一の我無きののみ。胸中切に有るべからず。有るは即ち傲なり。古先聖人許多の好處も、也た只是れ我れ無きののみ。我無ければ自ら能く謙る。謙るは衆善の基、傲るは衆惡の魁なり。

第九十二章 知行工夫本不可離

知之真切篤實處即是行。行之明覺精察處即是知。知行工夫本不可離。只爲後世學者分作兩件。用功失卻

〔真切篤實〕マジメに、テアツシ。ハツキ〔明覺精察〕ハツキリ、アラハレ、クハシク、カンガヘル。前は行、後は知、知行分つて二つとなす。行分つて二つとなす。行を揚ぐる。知を抑へ、

〔緊要〕キビシク、親切といふこと俗語なり。〔抑揚〕知を抑へ、行を揚ぐる。

知行本體故有合一並進之說。眞知即所以爲行。不行不足謂之知。即如來書云。知食乃食等說。可見前已略言之矣。此雖喫緊救弊而發。然知行一體。本來如是。非以己意抑揚其間。曰爲是說。以苟一時之効者也。專求本心。遂遺物理。此蓋失其本心者也。

〔讀方〕知の真切篤實なる處は即ち是れ行。行の明覺精察なる處は即ち是れ知。知行の工夫本と離るべからず。只だ後世學者の爲めに分ち

て兩截と作し功を用て知行の本體を失却するが故に合一並進の説あり。真知は即ち行となす所以行はざる之れを知と謂ふに足らず。即ち來書の云へる食を知るは乃ち食す等の説の如き見るべし。前已に略之を言ふ。此喫緊に弊を救ひて而して發すと雖も然れども知行の體本來是の如し。己が意を以て其間に抑揚し、姑く是説を爲して以て一時の効を苟くもするに非るなり。専ら本心を求め遂に物理を遺すは此れ蓋し其本心を失へるものなり。

「物理不外於吾心」朱子亦言ふ衆理を具へて而して萬事に應ず。本心の外、豈また物理あらんやと。有孝親之心。中庸に曰く「誠者物之終始。不誠無物。」晦庵云々。朱子の大學或問に出づ。告子の告子上に「告子曰。食色。性也。仁。内也。非外也。義。外也。非内也。」

夫物理不外於吾心。外吾心而求物理。無物理矣。遺物理而求吾心。吾心又何物邪。心之體性也。性即理也。故有孝親之心。即有孝之理。無孝親之心。即無孝之理矣。有忠君之心。即有忠之理。無忠君之心。即無忠之理矣。理豈外於吾心邪。晦菴謂人之所以爲學者。心與理而已。心雖主于一身。而實管乎天下之理。理雖散在萬事。而實不外乎一人之心。是其一分一



合之間而未免已啓學者心理爲二之弊。此後世所以有專求本心遂遺物理之患。正由不知心即理耳。夫外心以求物理。是以有闇而不達之處。此告子義外之說。孟子所以謂之不知義也。

**讀方** 夫れ物理は吾が心に外ならず。吾が心を外にして、而して物理を求むれば、物理無し。物理を遺して、而して吾が心を求むれば、吾心又何物ぞや。心の體は性なり。性は即ち理なり。

故に親に孝するの心あり。即ち孝の理あり。親に孝するの心無ければ、即ち孝の理なし。君に忠するの心有れば、即ち忠の理あり。君に忠するの心なければ、即ち忠の理なし。理は豈吾心に外ならんや。晦菴の人の學を爲す所以は、心と理とのみ。心一身に主たり、と雖も、而れども實に天下の理を管す。理は萬事に散在すと雖も、而れども實に一人の心に外ならずと謂へるは、是れ其一分一合の間にして、而して未だ已に學者心理を二となすの弊を啓くことを免か

れず。此れ後世専ら本心を求めて遂に物理を遺すの患ある所以にして、正に心即理なることを知らざるに由るのみ。夫れ心を外にして以て物理を求む。是を以て闇くして而して達せざるの處あり。此れ告子義外の説、孟子之れ義を知らずと謂ふ所以なり。

心一而已。以其全體惻怛而言。謂之仁。以其得宜而言。謂之義。以其條理而言。謂之理。不可外心以求仁。不可外心以求義。獨可外心以求理乎。外心

以求理。此知行之所以二也。求理於吾心。此聖門知行合一之教。吾子又何疑乎。

**讀方** 心は一のみ。其全體惻怛を以て言へば、之を仁と謂ひ、其宜きを得るを以て言へば、之を義と謂ひ、其條理を以て言へば、之を理と謂ふ。心を外にして以て仁を求め、心を外にして以て義を求むべからず。獨り心を外にして以て理を求むべからず。心を外にして以て理を求むれば、此れ知行の二なる所以なり。理を吾が心に

求むれば、此れ聖門知行合一の教、吾子又何ぞ疑はんや。

第九十三章 性無不善

性無不善。故知無不良。良知即是未發之中。即是廓然大公。寂然不動之本體。人人之所同具者也。但不能昏蔽於物欲。故須學以去其昏蔽。然於良知之本體。初不能有加損於毫末也。知無不良。而中寂大公。未能全者。是昏蔽之未盡去。而存之未純耳。

體即良知之體。用即良知之用。寧復有超然於體用之外者乎。

**讀方** 性は善ならざるなし。故に知は良ならざるなし。

然太公寂然動かざるの本體、人人の同じく具ふる所のものなり。但物欲に昏蔽せられざる能はず。故に學んで以て其昏蔽を去るべし。然れども良知の本體に於て、初より毫末を加損するあること能はず。知は良ならざるなし。而して中寂大公、未だ能く全きこと能はざるもの

は是れ昏蔽の未だ盡し去らず。而して存するの未だ純ならざるのみ。體即良知の體。用は即ち良知の用。寧ぞ復體用の外に寂然たるものあらんや。

第九十四章 樂是心之本體

樂是心之本體。雖不同於七情之樂。而亦不外於七情之樂。雖則聖賢別有真樂。而亦常人之所同有。但常人加迷棄。雖在憂苦迷棄之中。而此樂

〔樂是心之本體〕  
先又別に之を説きて曰く「一」  
於哀哭時此樂選在否先生曰須是大哭一番了方樂不哭便不樂矣雖哭此心安處即是樂也本體未嘗有動此章と參看すべし。  
〔迷棄〕マヨヒテ、其の眞樂をスツルな

り。  
〔反身而誠〕孟子盡心に「反身而誠」  
莫大焉とあり。  
〔騎驢〕求むる所のサギ馬。我がもとにもの、我がもとに却てを尋ねるをいふ。他燈録に「不即心即佛眞是」

又未嘗不存。但一念開明。反身而誠。則即此而在矣。每與原靜論。無非此意。而原靜尙有何道可得之。間是猶未免於騎驢覓驢之蔽也。

〔讀方〕樂は是れ心の本體。七情の樂に同じからずと雖も。而も亦七情の樂に外ならず。則ち聖賢別に眞樂ありと雖も。而も亦常人の同く有する所。但常人は之を有して而も自ら知らず。反て自ら許多の憂苦を求め自ら迷棄を加ふ。憂苦迷棄の中に在と雖も。而も此樂又未だ嘗て存せ

すんばあらず。但一念開明して身に反して而して誠あれば、則ち此に即て在り。毎に原静と論ずる此意に非ざるなし。而も原静尙は何の道か得べきの問ひあり。是れ猶ほ未だ驢に騎りて、驢を覓るの蔽を免れざるなり。

第九十五章 拔本塞源論

夫拔本塞源之論。不明於天下。則天下之學。聖人者。將日繁日難。斯人淪於禽獸夷狄。而猶自以爲聖人之學。吾之說。雖或暫明於一時。終將凍解。

〔字解〕「拔本塞源」左傳の昭公九年の文字。  
 ◎三輪執齋曰ふ。案するに是れ至論中の至論。明文中の明文。

秦漢より以來、數千歳の問、惟此一文あるのみ。

〔題〕字彙に暫くと同じとあり。  
 〔凍解〕氷のトケルこと。疑惑のとけるにふ。  
 〔氷堅〕氷結びて堅くなること。疑惑に結ぶにふ。  
 〔霧釋〕霧の如くトケ散すること。  
 〔雲滂〕雲の如くかさなること。滂は字彙に雲氣の濃き貌とあり。霧釋雲滂は、疑惑の發生にいふ。〔吹々馬〕カマビスシ。詩經「載載吹々」

於西而氷堅於東。霧釋於前而雲滂於後。吹々焉危困以死。而卒無救於天下之分毫也已。

〔讀方〕夫れ本を抜き源を塞ぐの論。天下に明ならざれば、則ち天下の聖人を學ぶもの。將に日に繁く日に難く、斯人禽獸夷狄に淪みて、而して猶自ら以て聖人の學となさんとす。吾の説或は暫く一時に明なりと雖も、終に將に西に凍解して、而して東に氷堅し、前に霧釋して、而して後に雲

滯せんとする。嗚嗚焉として危困して以て死し。而して卒に天下の分毫に救ひなきのみ。

【字解】「凡有血氣者」中庸に日月所照霜露所墜凡有血氣者莫不三稔親之の語より出づ。【昆弟赤子】昆は兄なり。赤子はチノミ子。【以天地萬物爲一體】程子の語。【有我之私】近思錄に程子曰。人有身。則有自私之理。宜難下與道一也。【聖人有憂】孟子の語に原づく。孟子に云ふ。聖人は先づ先づ我が心の同じく

夫聖人之心。以天地萬物爲一體。無外内遠近。凡有血氣。皆其昆弟赤子之親。莫不欲安全而教養之。以遂其萬物一體之念。天下之人心。其始亦非有異於聖人也。特其間於有我之私。隔物欲之蔽。大者以少通者以塞。人各有心。至有視其父子兄弟如仇讐者。聖人有憂之。是以推其天地萬

然るを得るのみ云々【堯舜禹】書の大禹【謙の語】【惟精惟一】人心を退けて、道心のみにするをいふ。【命契】條目に同じ【帝曰】書の舜典に【親。五品不遜。汝作司寇。敬敷五教。在寬。孟子滕文公上【食煖衣。逸居而無教。則近於禽獸。聖人有憂之。使契爲司徒。教以人倫。父子有親。君臣有義。夫婦有別。朋友有信。長幼有序。朋友有信。長幼

物一體之仁。以教天下。使之皆有克其私。去其蔽。以復其心體之同然。其教之大端。則堯舜禹之相授受。所謂道心惟微。惟精惟一。允執厥中。而其節目。則舜之命契。所謂父子有親。君臣有義。夫婦有別。長幼有序。朋友有信。五者而已。

【讀方】夫れ聖人の心は、天地萬物を以て一體となす。其天下の人を視る、外内遠近となく、凡そ血氣あるもの、皆其昆弟赤子の親のごとく、安全し

て而して之を教養し、以て其萬物一體の念を遂げんことを欲せざるなし。天下の人心其始め亦聖人に異なること有るに非ず。特に其有我の私に間られ物欲の蔽に隔てられ、大なるもの

以て少く通ずるもの、以て塞がる。人各心有り。父其子兄弟を視ること、仇讐の如くなる者あるに至る。聖人之を憂ふることあり。是を以て其天地萬物一體の仁を推して、以て天下に教へて、之をして皆以て其私に克ち其蔽を去りて、以て其心體の同然に復することあらしむ而して

其節目は、則ち舜の契に命せる所謂父子親あり。君臣義あり。夫婦別あり。長幼序あり。朋友信ある五の者のみ。

〔字解〕唐虞三代  
唐、虞は堯、舜、三代は夏、殷、周をいふ。  
〔啓明〕開明の才をいふ。朱は堯の子、丹朱のこと。○書の舜典に「帝曰。嚚若時登庸。放齊曰。胤子朱啓明。帝曰。吁。胤訟可乎。○孟子萬音上に「丹朱之子不肖」に「閻井。村閻市井。閻見之雜。記誦之煩。〓イタリ。ミタリの混雜。物を記誦するの煩多。

唐虞三代之世。教者惟以此爲教。而學者惟以此爲學。當是之時。人無異見。家無異習。安此者謂之聖。勉此者謂之賢。而背此者雖其啓明如朱。亦謂之不肖。下至閻井田野農工商賈之賤。莫不皆是學。而惟以成其德行爲務。何者。無有聞見之雜。記誦之煩。

「辭章之靡濫。功利馳逐。」詩文の浮靡、汎濫、功名利慾のガヒマハリ。

辭章之靡濫。功利之馳逐。而但使之孝其親。弟其長。信其朋友。以復其心體之同然。是蓋性分之所固有。而非假於外者。則人亦孰不能之乎。

讀方 唐虞三代の世、教ふるもの惟だ此を以て教と爲す。而して學ぶもの惟だ此を以て學と爲す。是の時に當りて人に異見なく、家に異習なし。此に安ずるものは之を聖と謂ひ、此を勉るものは之を賢と謂ふ。而して此に背くものは其啓明朱の如しと雖も、亦之を不肖と謂ふ。下

岡井、田野農工商賈の賤に至るまで、皆是の學あらざるなし。而して惟だ其德行をなすを以て務となす。何となれば、聞見の雜り、記誦の煩ひ、辭章の靡濫、巧利の馳逐あることなくして、而して但之をして其親に孝に、其長に弟に、其朋友に信ありて、以て其心體の同然に復らしむ。是れ蓋し性分の固有する所にして、而して外に假ること有るものに非れば、則ち人亦孰か之を能くせざらんや。

學校之中、惟以成德爲事、而才能之



〔水上播植〕

播植は土木事業。殖ウエル。農業のこ

と也。

〔象山〕 マカシ、ヒ

〔和らぎ樂し〕

〇老子經に「衆

人如春登芝蔴」

如春登芝蔴

自得して安

んする貌。孟子盡心

上に「王者之民皞

々如也。註に廣大自

得の貌。

◎象山集要の與三

道。書に曰ふ。古人

不名聲。不較。不

勝負。不特。才智。

皆是道義。道義之在

天下。在人心。豈能

泯滅。第今人大頭。

既没於利欲。不能

大自奮拔。則自附託

異ナル或有ハ長レバ於シ禮樂長ニ於シ政教長ニ於シ水  
土播植者則就キテ其成德而ニ因テ使ル益精  
其能於學校之中。迨夫舉德而任スル則  
使之終身居ラ其職而メ不易ハ用之者惟  
知同心一德以共安天下之民。視才  
之稱否而不以崇卑為輕重。勞逸為  
善惡。效用者亦惟知同心一德以共  
安天下之民。苟當其能則終身處於  
煩劇而不以為勞。安於卑瑣而不以  
為賤。當是之時天下之人熙熙皞皞

其間者。行或與古  
人同。情與古人異  
此不可不辨也。若  
此是道義。則無名聲  
可求。無勝負可較  
較。無才智可特。特  
無功無可。唐虞之  
時。禹益稷契。功被  
天下。澤及萬世。無  
一毫自多之心。云云  
〔學解〕 〔學、夔、稷、  
契、〕 夔陶は刑法を  
掌り、夔は音楽を掌  
り、稷は農業を掌り、  
契は教育を掌る。と  
もに書經舜典に出づ  
〔仰事俯育〕 仰きて  
は父母に事へ。附し  
ては妻子をやしなふ  
〇孟子梁惠王上に「  
仰足以事父母。俯  
足以畜妻子。」  
〔夷之通禮〕 書の  
舜典に「帝曰。咨四  
岳。有能典朕三禮。  
兪曰。伯夷。帝曰。」

皆相視如一家之親。其才質之下者。  
則安其農工商賈之分。各勤其業。以  
相生相養。而無有乎希高慕外之心。  
其才能之異。若臯夔稷契者。則出而  
各效其能。若一家之務。或營其衣食。  
或通其有無。或備其器用。集謀并力。  
以求遂其仰事俯育之願。惟恐當其  
事者之或怠而重之累也。故稷勤其  
稼。而不恥其不知教。視契之善教。即  
己之善教也。夔司其樂。而不恥於不

俞。容。伯汝作秩宗  
【純明】モツパラ、  
アキラカ。

【充周】ミ  
ナアマネシ「條暢」ト  
ホリノビル。「痒癢」  
カユキヤマヒ。  
【不言而喻】孟子盡  
心上に「四體不」言而  
喻」註に「體、言が  
言を待たずして、言  
して自ら能く言が言  
を曉るをいふ也。  
【至易至簡】アツリ

明<sup>ナツ</sup>禮<sup>ニ</sup>視<sup>ル</sup>夷<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>通<sup>ズル</sup>禮<sup>ニ</sup>即<sup>レ</sup>己<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>通<sup>ズル</sup>禮<sup>ニ</sup>也。蓋<sup>ニ</sup>  
其<sup>ノ</sup>心<sup>ヲ</sup>學<sup>ビ</sup>純<sup>ニ</sup>明<sup>ニ</sup>而<sup>テ</sup>有<sup>リ</sup>以<sup>テ</sup>全<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>萬<sup>ノ</sup>物<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>體<sup>ニ</sup>  
之<sup>ノ</sup>仁<sup>ヲ</sup>故<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>精<sup>ヲ</sup>神<sup>ヲ</sup>流<sup>シ</sup>貫<sup>シ</sup>志<sup>ヲ</sup>氣<sup>ヲ</sup>通<sup>シ</sup>達<sup>シ</sup>而<sup>テ</sup>無<sup>ク</sup>  
有<sup>ル</sup>乎<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>己<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>分<sup>ヲ</sup>物<sup>ノ</sup>我<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>間<sup>ヲ</sup>譬<sup>ス</sup>之<sup>ノ</sup>一<sup>ニ</sup>人<sup>ノ</sup>  
之<sup>ノ</sup>身<sup>ヲ</sup>目<sup>ヲ</sup>視<sup>キ</sup>耳<sup>ヲ</sup>聽<sup>キ</sup>手<sup>ヲ</sup>持<sup>チ</sup>足<sup>ヲ</sup>行<sup>キ</sup>以<sup>テ</sup>濟<sup>ス</sup>一<sup>ニ</sup>身<sup>ノ</sup>  
之<sup>ノ</sup>用<sup>ヲ</sup>目<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>耻<sup>ズ</sup>其<sup>ノ</sup>無<sup>キ</sup>聰<sup>ヲ</sup>而<sup>テ</sup>耳<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>所<sup>ヲ</sup>涉<sup>ル</sup>目<sup>ノ</sup>  
必<sup>ズ</sup>營<sup>ム</sup>焉<sup>ヲ</sup>足<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>耻<sup>ズ</sup>其<sup>ノ</sup>無<sup>キ</sup>執<sup>ル</sup>而<sup>テ</sup>手<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>所<sup>ヲ</sup>探<sup>ル</sup>  
足<sup>レ</sup>必<sup>ズ</sup>前<sup>ム</sup>蓋<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>元<sup>ノ</sup>氣<sup>ヲ</sup>充<sup>テ</sup>周<sup>シ</sup>血<sup>ノ</sup>脈<sup>ヲ</sup>條<sup>ニ</sup>暢<sup>ス</sup>是<sup>レ</sup>  
以<sup>テ</sup>痒<sup>ク</sup>病<sup>ム</sup>呼<sup>ク</sup>吸<sup>ク</sup>感<sup>キ</sup>觸<sup>キ</sup>神<sup>ヲ</sup>應<sup>ズ</sup>有<sup>リ</sup>不<sup>レ</sup>言<sup>ハ</sup>而<sup>テ</sup>喻<sup>ル</sup>  
之<sup>ノ</sup>妙<sup>ヲ</sup>此<sup>ノ</sup>聖<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>學<sup>ヲ</sup>所<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>至<sup>ル</sup>易<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>簡<sup>ニ</sup>易<sup>ニ</sup>

りとして分りやすし  
○易の上系辭に「乾  
以易知。坤以簡能。  
易則易知。簡則易  
從云々」

知<sup>ル</sup>易<sup>ヲ</sup>從<sup>テ</sup>學<sup>ブ</sup>易<sup>ヲ</sup>能<sup>ク</sup>而<sup>テ</sup>才<sup>ニ</sup>易<sup>ニ</sup>成<sup>ル</sup>者<sup>ハ</sup>正<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>大<sup>ニ</sup>  
端<sup>ニ</sup>惟<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>復<sup>ス</sup>心<sup>ノ</sup>體<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>同<sup>ニ</sup>然<sup>ル</sup>而<sup>テ</sup>知<sup>ル</sup>識<sup>ヲ</sup>技<sup>ヲ</sup>能<sup>ヲ</sup>  
非<sup>ズ</sup>所<sup>ニ</sup>與<sup>フ</sup>論<sup>ス</sup>也。

【識方】學校の中唯だ徳を成すを以て事と爲す。

而<sup>シテ</sup>才<sup>ノ</sup>能<sup>ノ</sup>異<sup>ナル</sup>或<sup>ハ</sup>禮<sup>ノ</sup>樂<sup>ニ</sup>長<sup>シ</sup>政<sup>ノ</sup>教<sup>ニ</sup>長<sup>シ</sup>  
ト水土播植に長ずる者あれば則ち其成徳に就<sup>キ</sup>  
きて而<sup>シテ</sup>因<sup>ツテ</sup>益<sup>々</sup>其<sup>ノ</sup>能<sup>ヲ</sup>を學校の中<sup>ニ</sup>精<sup>シ</sup>せ<sup>シ</sup>  
しむ。夫<sup>ノ</sup>徳<sup>ヲ</sup>を舉<sup>ゲテ</sup>任<sup>ズル</sup>に及<sup>ビテ</sup>は則<sup>チ</sup>  
之<sup>ヲ</sup>を身<sup>ヲ</sup>を終<sup>ル</sup>るまで其<sup>ノ</sup>職<sup>ニ</sup>に居<sup>らしめ</sup>而<sup>シ</sup>  
て易<sup>ヘ</sup>ず。之<sup>ヲ</sup>を用<sup>ゐる</sup>ものは唯<sup>だ</sup>心<sup>ヲ</sup>を同<sup>じく</sup>

し徳を一にして以て共に天下の民を安ずるを  
 知り、才の稱否を視て、而して崇卑を以て輕重と  
 なし、勞逸を以て善惡と爲さず。用を効す者も、  
 亦惟だ心を同くし、徳を一にして以て共に天下  
 の民を安ずるを知り、苟も其能に當れば、則ち身  
 を終ふるまで、煩劇に處りて、而して以て賤と爲  
 さず。是の時に當りて、天下の人熙熙皞皞とし  
 て皆相視ること一家の親の如し。其才質の下  
 れる者は、則ち其農工商賈の分に安じて、各其業  
 を勤め、以て相生じ相養うて、而して高さを希ひ

外を慕ふの心あることなし。其才能の異なる、  
 臯夔稷契の若きものは、則ち出て、而して各々  
 其能を效すこと一家の務の若く、或は其衣食を  
 營み、或は其有無を通じ、或は其器用を備へ、謀を  
 集め力を并せ、以て其仰事俯育の願を遂げんこ  
 とを求む。惟だ其事に當れる者の、或は怠りて  
 而して之が累を重ねんことを恐る。故に稷は  
 其稼を勤めて、而して其教を知らざるを耻ぢず。  
 契か善く教ふるを視る、則ち己れ之れを善く教  
 ふるがごとき也。夔は其樂を司りて、而して禮

に明ならざるを耻ぢず、夷の禮に通ずるを視る、即ち己れ禮に通ずるがむとき也。蓋し其心學純明にして而して以て其萬物一體の仁を全くすることあり。故に其精神流貫し志氣通達して、而して人己の分ち。物我の間て有ることなし。之を一人の身に譬ふるに、目視耳聽さ手持ち足行きて以て一身の用を濟し、目は其聰なきを耻ぢず。而して耳の渉る所、目は必ず營む。足は其執ることなきを耻ぢず。而して手の探る所、足必ず前む。蓋し其元氣充周し、血脈條暢す。

是を以て瘁病呼吸、感觸神應言はずして而して、諭るの妙あり。此れ聖人の學、至易至簡、知り易く、従ひ易く、學能し易く、而して才成し易き所以のもの、正に大端惟だ心體の同然に復るに在り。而して知識技能與に論ずる所に非るを以てなり。

三代之衰、王道熄、而霸術熾。孔孟既沒、聖學晦、而邪說橫。教者不復、以此爲教。而學者不復、以此爲學。霸者之徒、竊取先王之近似者、假之於外、以

字解 〔王道〕孟  
子離婁下に「王者之  
迹熄而詩亡」注に平  
王東遷して政教號令  
天下に及ばざるを謂  
ふ也

〔字解〕〔假之外〕孟子盡心上に「堯舜之也。湯武身之也。五霸假之也。」  
 〔無害〕アレハテ、フサカリ通ゼザルこと。○程明道。論異端曰。是皆正路之藜蕪。聖門之蔽塞。闢之而後可。以入道。  
 〔倣效〕ナラヒ、ナラフ。  
 〔傾詐之謀〕人を傾覆する詐欺の計。  
 〔管仲、商、蘇、張〕管仲、商鞅、蘇秦、張儀、是皆霸功輔謀の徒、其傳共に史記に見ゆ〔名數〕名ザシカゾヘル。  
 〔世之儒者〕前後漢の儒者を指す。

内濟其私己之欲。天下靡然而宗之。聖人之道。遂以蕪塞。相倣相效。日求所以富強之說。傾詐之謀。攻伐之計。一切欺天罔人。苟一時之得。以獵取聲利之術。若管商蘇張之屬者。至不可名數。既其久也。鬪爭劫奪。不勝其禍。斯人淪於禽獸。夷狹而霸術亦有不能行矣。世之儒者。慨然悲傷。蒐獵先聖王之典章法制。而掇拾修補於煨燼之餘。蓋其爲心良亦欲以挽

〔典章法制〕古典、諸制度、  
 〔掇拾修補〕ヒロヒトリ、チサメオゴナソ。  
 〔煨燼之餘〕秦の始皇、天下の書を焚き、其の殘漏或は存するものをいふ。  
 〔宣暢光復〕ノベヒロケテ、もとの光りに復す。  
 〔聖學之門牆〕論語子張篇に「夫子之牆數仞。不得其門而入。不見宗廟之美。百官之富。」

回先王之道。聖學既遠。霸術之傳。積積漬深。雖在賢智。皆不免於習染。其所以講明修飭。以求宣暢光復。後於世者。僅足以增霸者之藩籬。而聖學之門牆。遂不復可觀。

〔讀方〕三代の衰ふる王道熄みて、而して覇術熾なり。孔孟既に没し、聖學晦して、而して邪說横はる。教る者復た此を以て教と爲さず。而して學ぶもの復た此を以て學と爲さず。覇者の徒、先王の近く似たる者を竊み取りて、之を外に假りて以

て内其私己の欲を濟す。天下靡然として、而して之を宗とし、聖人の道遂に以て蕪塞す。相倣ひ相效ひて、日に富強する所以の說を求め、傾詐の謀、攻伐の計、一切天を欺き人を罔ひ一時の得を苛もして、以て聲利を獵取するの術、管商蘇張の屬の若き者、名數すべからざるに至る。既にして其久しき、鬪爭劫奪、其禍に勝へず。斯人禽獸夷狄に淪みて、而して覇術も亦行ふこと能はざる所有り。世の儒者慨然として悲傷し、先聖王の典草法制を蒐獵して、而して煨燼の餘を掇

拾修補す。蓋し其心爲る良に亦以て先王の道を挽回せんと欲すれども、聖學既に遠く、覇術の傳、積漬已に深し。賢智在りと雖も、皆習染を免れず。其講明修飾して、以て世に宣暢光復せんことを求むる所以の者、僅に以て覇者の藩籬を増すに足る。而して聖學の門牆遂に復觀る可らず。

於是乎。有訓詁之學。而傳之以爲名。有記誦之學。而言之以爲博。有詞章之學。而侈之以爲麗。若是者。紛紛籍籍。

〔字解〕〔萬徑千蹊〕  
徑、蹊、共にコミ  
〔誰謂跳跟〕 誰カマ  
ビスシ。踏タハムル。  
跳チドル。跳イサミ



其出而仕也。理錢穀者。則欲兼夫兵刑。典禮樂者。又欲與於銓軸。處郡縣。則思藩臬之高。居臺諫。則望宰執之則。故不能其事。則不得以兼其官。不通其說。則不可以要其譽。記誦之廣。適以長其傲也。知識之多。適以行其惡也。聞見之博。適以肆其辨也。辭章之富。適以飾其偽也。是以臯夔稷契。所不能兼之事。而今之初學小生。皆欲通其說。究其術。其稱名借號。未嘗

不曰吾欲以共成天下之務。而其誠心實意之所在。以為不如是。則無以濟其私。而滿其欲也。嗚呼。以若是之積染。以若是之心志。而又講之以若是之學術。宜其聞吾聖人之教。而視之以為贅疣柄鑿。則其以良知為未足。而謂聖人之學為無所用。亦其勢有所必至矣。

**讀方** 是に於てか訓詁の學ありて、而して之を傳へて以て名と爲し、記誦の學ありて、而して之を



言ひて以て博と爲し、詞章の學ありて、而して之を侈りて以て麗と爲す、是の若きもの紛紛籍籍として、天下に群起角立し。又其幾家なるを知らず。萬徑千蹊、適く所を知るなし。世の學者百戲の場に入るが如く、謹謹跳踉、寄を騁せ巧を闘し、笑を獻じ、奸を争ふ者、四面より競ひ出で、前際後眛、應接に違わらず、而して耳目眩瞶し、精神恍惚して、日夜其間に遨遊淹息し、狂を病心を喪ふの人、の如く自ら其家業の歸する所を知るなし。時君世主も亦皆其説に昏迷顛倒し、而して

身終るまで無用の虚文に従事して、自ら其所謂を知るなし。間ま其空疎謬妄、支離牽滯を覺え、而して卓然として自ら奮ひ、以て諸を行事の實に見んと欲する者あれども、其抵る所を極むるに亦富強功利、五霸の事業を爲すに過ぎずして、而して止む。聖人の學、日に遠く日に晦く、而して功利の習愈々趨り愈々下る。其間嘗て佛老に警惑すと雖も、而も佛老の説、卒に亦未だ以て其功利の心に勝つことある能はず。又嘗て群儒に折衷すと雖も、而れとも群儒の論、終に亦未

だ功利の見を破る有る能はず。蓋し今に至るまで、功利の毒人の心髓に淪浹して、而して習ひ以て性と成ること幾んど千年、相矜るに知を以てし、相軋るに勢を以てし、相争ふに利を以てし、相高ぶるに技能を以てし、相取るに聲譽を以てし、其出で、仕ふるや、錢穀を理むる者は、則ち夫の兵制を兼ねんと欲し、禮樂を司る者は、輜軸に與らんと欲し、郡縣に處れば、則ち藩臬の高さを思ひ、臺諫に居れば、則ち宰執の要を望む。故に其事を能くせず。則ち以て其官を兼ぬるを得

ず。其説に通せざれば、則ち以て其譽を要べからず。記誦の廣さは、適々以て其傲を長ずるなり。知識の多きは、適々以て其惡を行ひ、聞見の博きは、適々以て其辨を肆にするなり。辭章の富めるは、適々以て其偽を飾るなり。是を以て阜夔稷契兼ぬる能はざる所の事も、而も今の初學小生、皆其説に通じ、其術を窺はんと欲す。其名を稱し、號を借れる未だ嘗て吾以て其天下の務を成さんと欲すと曰はざるはあらず。而して其誠心實意の在る所以爲く是の如くならざ

れば、則ち以て其和を濟し、而して其欲を満たす  
 無しと。嗚呼、是の若きの積深を以てし、是の若  
 きの心志を以てして、而して又之を講ずるに、是  
 の若きの學術を以てす。宜なり。其吾が聖人  
 の教を聞きて、而して之を視て、以て贅疣、柄鑿と  
 爲れば、則ち其良知を以て、未だ足らずと爲し、而  
 して聖人の學を謂つて、用る所無しと爲すこと。  
 亦其勢、必ず至る所有らん。

嗚呼、士生斯世、而尙何以求聖人之  
 學乎。尙何以論聖人之學乎。士生斯

世、而欲以爲學者、不亦勞苦而繁難  
 乎。不亦拘滯而險難乎。嗚呼、可悲也。  
 已。所幸天理之在人心、終有所不可  
 泯、而良知之明、萬古一日、則其聞吾  
 拔本塞源之論、必有惻然而悲、戚然  
 而痛、憤然而起、沛然若決江河、而有  
 所不可禦者矣。非夫豪傑之士、無所  
 待而興者、吾誰與望乎。

讀方 嗚呼、士、斯世に生れて、而して尙ほ何を以て  
 か聖人の學を求めん。尙ほ何を以てか聖人の

學を論せん。士、斯世に生れて、而して以て學を爲さんと欲する者、亦勞苦して而して繁難ならずや。亦拘滯して而して險難ならずや。嗚呼、悲むべきのみ。幸とする所は天理の人心に在りて、終に泯ぼすべからざる所あり。而して良知の明、萬古一日なれば、則ち其吾が本を抜き源を塞ぐの論を聞かば、必ず惻然として而して悲み、戚然として而して痛み、憤然として而して起るとありて、沛然として江河を決するが若くにして、而して禦ぐべからざる所の者あらん。夫

の豪傑の士の待つ所無くして、而して興る者にあらずんば、吾れ誰と與に望まんや。

第九十六章 立志説

予弟守文來學告之以立志守文因請次第其語使得時時觀省且請淺近其辭則易於通曉也。因書以與之。

〔字解〕〔守文〕龍山公の第三子、先生の弟なり。龍山公四子あり。長は先生、次は守儉、次は守文、次は守章。

〔讀方〕之に告ぐるに志を立つるを以てす。守文因りて其語を次第して時時に觀省することを得せしめんことを請ふ。且つ請ふ其辭を淺近にせ

ば、則ち通曉するに易からんと、因て書して以て之に與ふ。

夫學莫先於立志。志之不立，猶不種其根而徒事培擁灌溉，勞苦無成矣。世所以因循苟且，隨俗習非而卒歸於汚下者，凡以志之弗立也。故程子曰：有求爲聖人之志，然後可與共學。

**讀方** 夫れ學は志を立つるより先きなるはなし。志の立たざるは、猶ほ其根を種えずして、而して徒らに培擁灌溉を事とするが如し。勞苦して

〔培擁灌溉〕 擁は堆の誤り。培擁は土ツチカフ。灌溉は水ソ、ガ。〔汚下〕 心イヤシク下品なるをいふ。○孟子公孫丑上に「宰我、子貢、有若、曾足、以知聖人。汚不至阿其所好。」朱註に「汚下也」とあり。程伊川の語。近思錄及び論語集註に之を載す。

成ることなし。世の因循苟且し、俗に隨ひ非に習ひ、而して卒に汚下に歸するものは、凡そ志の立たざるを以てなり。故に程子の曰く、聖人と爲んことを求むるの志ありて、然る後に與に共に學ぶべしと。

苟誠有求爲聖人之志。則必思聖人之所以爲聖人者。安在？非以其心之純乎？天理而無人欲之私。歟？聖人之所以爲聖人。惟以其心之純乎？天理而無人欲。則我之欲爲聖人。亦安在？

〔先覺〕 道を修得せる先輩。○孟子萬章下に「天之生斯民也。使先覺覺之。後知。使先覺覺之後。知。予天民之先覺者也。」古訓「古聖賢のオシヘ。四書六經皆是也。○尙書說命下に「學于古訓。乃有獲。云々より出づ。」

於此心之純乎天理而無人欲耳。欲此心之純乎天理而無人欲則必去人欲而存天理。務去人欲而存天理則必求所以去人欲而存天理之方。則必求所以去人欲而存天理之方正諸先覺考諸古訓而凡所謂學問之功者然後可得而講而亦有所不容己矣。

**讀方** 苟くも誠に聖人と爲んと求るの志あらば、  
 則ち必ず思ふ。聖人の聖人たる所以のものは

安に在るか。其心の天理に純にして而して人欲の私なきを以てなるに非ずや。聖人の聖人たる所以は惟だ其心の天理に純にして而して人欲なきを以てなれば則ち我の聖人とならんと欲するも亦惟だ此心の天理に純にして而して人欲なきに在るのみ。此心の天理に純にして人欲なきを欲せば則ち必ず人欲を去りて而して天理を存す。務て人欲を去り而して天理を存すれば則ち必ず人欲を去り天理を存する所以の方を求む。人欲を去り天理を存する所

以の方を求むれば、則ち必ず諸を先覺に正し、諸を古訓に考ふ。而して凡そ所謂る學問の功なる者にして、然る後に得て講すべし。而も亦己を容れざる所あり。

夫所謂正諸先覺者、既以其人爲先覺而師之矣。則當專心致志、惟先覺之爲聽。言有不合、不得棄置、必從而思之。思之不得、又從而辨之。務求了釋、不敢輒生疑惑。故記曰：師嚴然後道尊。道尊然後民知敬學。苟無尊崇

〔記曰〕禮記學記の語。

篤信之心。則必有輕忽慢易之意。言之而聽之不審、猶不聽也。聽之而思之不慎、猶不思也。是則雖曰師之、猶不師也。

〔讀方〕夫所謂る諸を先覺に正すとは、既に其人を以て先覺となし、而して之を師とするなり。則ち當に心を專にし、志を致し、惟だ先覺に之れを聽くことを爲すべし。言合ざることありとも棄て置ことを得ざれ。必ず従つて之を思ふ。之を思ふを得ざれば、又従うを而して之を辨じ、





も感ずる心これなし  
眞に其の處分ある人  
を見れば、聖賢の書を  
入る也。聖賢のみならず  
空しく讀む人のみならず  
を、譬へば人の劍術に  
て、少くも自分にて得  
心出來ず、自分にて得  
心出來ずば、萬一立  
ち合へといはれし時  
逃ぐるより外あるま  
じき也。

教ふるに非るなし。五經四書の如き是れのみ。  
吾れ惟だ吾の人欲を去り、吾の天理を存するを  
欲して、而して其方を得ず。是を以て之を此に  
求むれば、則ち其卷を展ずるの際、眞に饑者の食  
に於て飽かんことを求むるのみ。病める者の  
藥に於て、癒ることを求むるのみ。暗者の燈に  
於て、照すことを求むるのみ。跛なへるもの、  
杖に於て行んことを求むるのみなるが如し。  
曾て徒らに記誦講説を事として、以て口耳を資  
くるの弊あらんや。

〔十有五〕  
論語爲政篇に出づ。

夫立志亦不易矣。孔子聖人也。猶曰。  
吾十有五而志于學。三十而立。立者  
志立也。雖至於不踰矩。亦志之不踰  
矩也。志豈可易而視哉。

夫れ志を立つること亦易からず。孔子の  
聖人にして、猶曰く、吾十有五にして學に志し、三  
十にて立つと。立つとは志の立つ也。矩を踰  
えざるに至ると雖も、亦志の矩を踰えざる也。  
志豈易らして視るべけんや。

夫志氣之帥也。人之命也。木之根也。

字解 「志氣之帥」  
孟子公孫丑上の語

水之源也。水不涸則流不息。不植則木枯。命不續則人死。志不立則氣昏。是以君子之學無時無處而不以立志為事。正目而視之無他見也。傾耳而聽之無他聞也。如猫捕鼠如鷄覆卵。精神心思凝聚融結而不復知有其他。然後此志常立。神氣精命義理昭著。一有私欲即便知覺。自然容住不得矣。故凡一毫私欲之萌只責此志不立。即私欲便退。聽一毫客氣之動。

便責此志不立。即客氣便消除。或怠心生。責此志不怠。忽心生。責此志不忽。燥心生。責此志不燥。妬心生。責此志不妬。忿心生。責此志不忿。貪心生。責此志不貪。傲心生。責此志不傲。吝心生。責此志不吝。蓋無一息而非立志。責志之時無一事而非立志。責志之地故責志之功。其於去人欲有如烈火之燎毛。太陽一出而魍魎潛消也。

**讀方** 夫れ志は氣の帥なり。人の命は木の根なり。水の源なり。源濬からざれば則ち流れ息み、根根えざれば則ち木枯れ、命續かざれば則ち人死し、志立たざれば則ち氣昏し。是を以て君子の學時と處となく、而して志を立つるを以て事と爲さざるることなし。目を正くして而して之を視、他を見ることなく、耳を傾けて之を聽き、他を聞くことなく、猫の鼠を捕ふる如く、鶏の卵を覆すが如く、精神心思、凝聚融結して而して復た其他有るを知らず。然る後此志常に立ち、神

氣精命、義理昭著にして一も私欲有れば便ち知覺し、自然に容住し得ず。故に凡そ一毫私欲の萌せるとき、只此志の立たざるを責むれば、即ち私欲便ち退聽し、一毫客氣の動けるとき、只此志の立たざるを責むれば、即ち客氣便ち消除す。或は怠心生せしとき、此志を責むれば、即ち怠らず。忽心生せしとき、此志を責むれば、即ち忽せならず。慄心生せしとき、此志を責むれば、即ち慄がず。妬心生せしとき、此志を責むれば、即ち妬まず。忿心生せしとき、此志を責むれば、即ち

怒らず。貪心生せしとき、此志を責むれば、即ち  
 貪らず。傲心生せしとき、此志を責むれば、即ち  
 傲らず。吝心生せしとき、此志を責むれば、即ち  
 吝ならず。蓋し一息として志を立て、志を責む  
 るの時に非ることなく、一事として志を立て、志  
 を責むるの時に非ざることなし。故に志を責  
 むるの功、其人欲を去るに於ける、烈火の毛を煉  
 き、太陽一たび出で、而して魍魎潜消するが如  
 きあり。

自古聖賢因時立教。雖若不同。其用

〔符契〕 同  
 じきこと。符を合は  
 す。如しと。なり。○孟  
 子。離婁下に。符若合  
 符。節註に。符節は、  
 玉を以てす。文字を  
 篆刻して之を中分し  
 彼。此各其の半を藏す  
 故。あれば。則ち左右  
 相合して以て信と爲  
 す。符節を合するが  
 如しとは、其の同じ  
 きをいふ也。

功。大指無或少異。書謂。惟精惟一。易  
 謂。敬以直内。義以方外。孔子謂。格致  
 誠意。博文約禮。曾子謂。忠恕。子思謂。  
 尊德性而道問學。孟子謂。集義養氣  
 求其放心。雖若人自爲說。有不可強  
 同者。而求其要領歸宿。合若符契。

〔讀方〕 古より聖賢時に因りて教を立ること、同か  
 らざるが若しと雖も、其功を用ゐる大指は少く  
 異なることあることなし。書に謂ふ。惟れ精惟一  
 れ一と。易に謂ふ。敬以て内を直くし、義以て

外を方にすと。孔子の謂ふ。格致誠正博文約  
 禮と、曾子の謂ふ、忠恕と。子思の謂ふ、徳性を尊  
 して、而して問學に道ると。孟子の謂ふ。義を  
 集め氣を養ふと。其放心を求むる、人々自ら説  
 を爲し、強て同ふすべからざるものあるが如し  
 と雖も、而も其要領歸宿を求むれば、合すること  
 符契の若し。

何者夫道一而已道同則心同心同  
 則學同其卒不同者皆邪説也後世  
 大患尤在無志故今以立志爲説中

間字字句句莫非立志蓋終身問學  
 之功只是立得志而已若以是説而  
 合精一則字字句句皆精一之功以  
 是説而合敬義則字字句句皆敬義  
 之功其諸格致博約忠恕等説無不  
 脗合但能實心體之然後信予言之  
 非妄也

**讀方** 何となれば、夫れ道は一而已、道同じければ  
 則ち心同じ。心同じければ、則ち學同じ。其卒  
 に同じからざるもの、皆邪説なり。後世の大患

尤も志なきにあり。故に今志を立つるを以て  
 説を爲す。中間の字字句句志を立つるに非る  
 ことなし。蓋し終身問學の功、只是れ志を立て  
 得るのみ。若し是の説を以て、而して精一に合  
 すれば、則ち字字句句皆精一の功、是の説を以て、  
 而して敬義に合すれば、則ち字字句句皆敬義の  
 功、其の諸の格致、博約、忠恕等の説、聰合せざるこ  
 となし。但能く實心に之を體して、然る後、予が  
 言の妄に非ることを信せん。

王陽明傳習錄 終

王陽明先生傳

家系

先生名は守仁、字は伯安、其の先は晋の光祿大夫王覽の裔に出づ。本  
 と耶號の人なり。曾孫右軍將軍義之に至り、徙りて山陰に居る。又二  
 十三世廸功耶壽、達溪より餘姚に徙りて、遂に餘姚の人と爲る。これよ  
 り子孫世々此に居る。祖、名は天叔、竹軒と號す。父、名は華、字は德輝、別  
 に實庵と號し、晩に海日翁と稱し、又た龍山公と稱す。進士及第一人を  
 賜はり、仕へて南京の吏部尙書に至り、進みて新建伯に封ぜらる。常に  
 山陰の山水佳麗にして、又た先世の故居たるを思ひ、復た姚より越城の  
 光相坊に徙りて之に居る。

奇夢

母の鄭氏、懷娠凡そ十四ヶ月、祖母の岑、一夜夢に神人の緋衣を着け、佩  
 玉を腰にし、雲中より一小兒を送り來るを夢む。驚き醒むれば、啼聲を  
 聞く。時に乍ち侍女鄭氏の己に兒を産むを報す。兒は即ち先生なり。

明の憲宗、成化八年九月三十日、實に我が國の文明四年にして、足利義尙の立つて將軍となりし年に當る。祖父竹軒公、故に名を命じて雲といふ。郷人因りて其の生るゝところを指して、瑞雲樓と曰ふ。雲五歳にして尙ほもの言ふ能はず。一日神僧ありこゝを過ぎりて、少女の其名を呼ぶを聞き、雲の頭を摩して曰ふ。好兒惜むらくは其の名をあらはに命したりと、竹軒公、夢の洩らすべからざるをさとり、乃ち名を守仁と更む。是の日遂に能く言ひ、且つ祖父の嘗て讀むところの書を誦す。訝り聞ふて曰く、兒何を以て能く誦すと、對へて曰ふ、嚮きにもものいはずと雖も、聲を聞いて己に默記せりと。

十一歳の詩

成化十八年、父京師に在り、祖父竹軒公を迎養す。竹軒公、先生を携へて同じく往く。金山寺を過ぎ、竹軒公客と酒を酌み、宴酣にして、詩を作らんと欲すれども未だ成らず。先生傍に在りて筆を索む。竹軒公曰く、孺子亦た能く賦する耶と。先生即ち四句を書して云ふ。  
 金山一點大如拳、  
 醉倚妙高樓上月。  
 打、破、維、揚、水、底、天、  
 王、簫、吹、徹、洞、龍、眠、

と座客驚異し、成な爲めに起敬す。しばらくして蔽月山房に遊ぶ。竹軒公曰く、孺子選た一詩を作るか否かと、先生聲に應じて、吟じて曰く、

山、近、月、遠、覺、月、小、  
 若、人、有、眼、大、如、天、

便、道、此、山、大、於、月、  
 還、見、山、小、月、更、濶、

座客竹軒公に謂て曰く、令孫の聲口、俱に凡想に落ちず。想ふに他日定めて當に文章を以て天下に名あるべしと、先生笑うて曰く、文章は小事、何ぞ名を成すに足らん。』と、衆益々之れを異とす。先生時に年十一。

天下第一等の人

翌年京師に在り。塾師に就いて學ぶ。而かれども肯て専心誦讀せず。分て、群兒と戯むれ、大小の旗幟を製して、群兒に付し、持ちて四面に立たしめ、己を大將となし、中に居りて之れを指揮し、略ぼ戰陣の勢の如し。父之れを見、怒りて曰ふ。吾家世々讀書を以て顯はる。安んぞ是を用ゐるを爲さむと、先生笑ふて曰く、讀書何の用ゐる處あらん』と、敢へて従はず。嘗つて塾師に問うて曰く、天下何事をは第一等の人となす』と、塾師曰く、鬼科高第、親を顯はし名を揚ぐる、汝の父の如ければ、乃ち第一等の人也と、先生曰く、豈に是れを人間第一流となさんや、』塾師曰

く、汝の見によれば、何事を以て第一と爲すか。先生曰く「唯だ聖賢は方  
さに是れ第一等也」と父之れを聞きて笑うて曰く、孺子の志何んぞ其れ  
奢れると。

四方經略の志

先生年甫めて十五、居庸三關に遊び、慨然として四方を經略する志あ  
り。一日夢に伏波將軍の廟に謁し、詩を賦して曰く、

卷甲歸來馬伏波。  
雲埋銅柱雷轟折。

早○年○兵○法○變○毛○幡○  
六○字○題○文○尙○不○磨○

時に畿内盜起り、又た秦中石劄亂を作す。因りて屢々書を爲りて朝に  
獻せんと欲せしに、父之を斥けて狂とせしかば乃ち止む。孝宗の弘治  
元年、年十七、餘姚に歸る。夫人諸氏を洪都に親迎し、合巹の日、たま  
問行して鐵柱宮に入り、道士に遇ふ。因りて養生の説を聞き、遂に相與  
に對座して歸るを忘る。諸公訝りて之れを索む。先生翌朝に至りて  
始めて還る。官署の中、紙數篋を蓄ふ。先生日に取つて書を學ぶ。歸  
るころ數篋皆空しく、書法大に進む。先生嘗て人に語りて曰く「昔始め  
書を學ぶや、古帖を對模し、字形を得るに止まる。後ち筆を擧げ、軽く紙

に落さず。思を凝らし慮を靜にし、形を心に擬す。之れを久しうして、  
始めて其の法に通すと、既にして後ち程明道の書を讀みて曰ふ「吾れ古  
人の時に隨ひ、事に隨ひ、唯だ心上に在りて學ぶ。此の心精明なれば、字  
の好きも、亦た其の中に在り」と。後ち學者と格物を論ずれば、多く此れ  
を擧げて以て證と爲す。是の年始めて聖學を慕ふ。先生人に接する  
に故らに和易善く語す。一日之を悔え、遂に端坐して言を省く。人未  
だ信ぜず。先生色を正しうして曰く「吾昔放逸、今過てるを知る」と。

兵法

同十年京師に寓居す。當時邊塞事ありて報急なり。是に於て心を  
武事に留め、凡そ兵家の秘書、精究せざるはなし。賓客にあふ毎に果核  
を聚め、陣勢を列れて以て戲を爲す。時に年二十六。越えて二年進士  
出身に擧げらる。星變あり。朝廷詔を下して言を求む。先生乃ち邊  
務八事を上つる。言極めて剴切なり。二十九歳、刑部雲南の清吏司主  
事を授けらる。三十一歳、越に歸りて室を陽明洞中に築き、道引術を行ひ、  
之れを久しうして遂によく先知す。後悟りて曰く「此れ精神を簸弄す。  
道にあらざる也」と之れを屏ぞけ去る。三十二歳、山東の郷試を主考し、



後兵部武選清吏司主事に改まる。三十四歳、世の學者詞章記誦に溺れ、復た身心の學あるを知らざるを慨し。専ら聖學を唱ふ。

龍場驛

正徳元年、孝宗崩じて武宗位に即く、劉瑾といへるもの、政柄を竊み威權を擅にするや、戴銑、薄彦徽の徒、これを諫め、遂に旨にさからひて獄に繋がる。先生之を救はんと欲して疏を上つり、瑾の怒りに觸れて、獄に下され、廷杖四十、既に絶して復た蘇す。尋ぎて貴州の龍場驛亟に謫せらる。時に途に錢塘に至りしとき、瑾、人を遣はし隨ひ偵はしむ。先生其の免かるゝ能はざるをばかり、乃ら欺きて江に投すと言ひ、以て之を脱し、因て商船に附き、舟山に遊ぶ。偶々颶風の大に作るに遇ひ、一日夜にして國界に至る。岸に登りて山徑を奔ること數十里。夜一寺をたゞきて宿を求む。僧ことさらに納れず。故に野廟に趨り香案に倚りて臥す。蓋し虎穴なり。夜半虎來りて廊を遶り、大に吼ゆれども、敢て入らず。黎明僧おもへらく、必ず虎に斃ると、將きに其の所持の金品を奪はんとす。先生の方さに熟睡するを見、始めて驚いて曰はく、公は常人に非らず。然らずんば何ぞ恙なきを得んと。乃ち一詩を壁に題し

險○夷○原○不○滯○胸○中○  
夜○靜○海○濤○三○萬○里○

何○異○浮○雲○過○大○空○  
月○明○飛○錫○下○天○風○

既にして問道を取り、武夷に由りて歸る。時に同二年、年三十六。

格物致知

翌三年の春、龍場に至る。龍場は貴州の西北、萬山叢林の中に在り。蛇虺、魍魎、蟲毒、瘴癘、ともに多し。夷人は舐舌語り難く、語を通ずるものは皆中土の亡命の人なり。舊と居無し。始めて之に土を籠し木を架し以て居るを教ふ。時に瑾の憾み未だ已まず。自ら計るに得失榮辱、皆よく超脱すれども、唯だ生死の一念尙ほ未だ去らざるを覺ゆ。乃ち石瑯をつくり、自ら誓つて曰く、吾れ唯だ命を俟つのみと、日夜端居、證黙して以て靜一をもとむ。之れを久しうして胸中灑々たり。而かれども從ふ者皆病む。自ら薪を取り水を取り、糜を作りて之れを食はしむ。又た其の抑鬱を懷かんことを恐れ、則ちともに詩を歌ひ、又悦ばざれば越の山を調べ、雜ふるに詼笑を以てし、始めて能く其の疾病と夷土の患難とを忘る。因りて念ふ。聖人此に處るとも更に何の陋しきことか

之れあらむと、曾て夜半大に格物致知の旨を悟る。寐寤の中、人の之れに語るあるが如く、覺えず呼躍す。從者皆驚く、此の時始めて聖人の道は吾性自ら足り、向きの理を事物に求むるものは誤れるを知り、乃ち黙記せる五經の言を以て、之を證するに脗合せざるはなし。因て五經臆説を著はし、居ること久しうして夷人も亦た日に來りて親狎す。居る所の湫濕なるを以て、乃ち木を伐り樓亭を構へて以て之れに居る。同四年、始めて知行合一を論ず。

流賊討伐

時に朝廷は劉瑾の專恣日に甚だしく、天下の安危測られざるに至りしかば、楊一清、張永等密かに帝に奏するに瑾の逆を以てし、遂に瑾を誅し、其の黨與を斥け、さきの直諫の諸臣を召還す。是に於て先生は廬陵縣の知縣に陞るを得たり。五年十二月、南京の刑部、四川の清吏司主事に陞る。其の後ますます累進して同十一年九月都察院の左僉都御史に陞り、南憲、汀漳等を巡檢せしめらる。同十二年正月憲に至らんとして、路、萬安を過ぐる時、流賊數百、途に沿うてほしいまゝに却掠し、舟敢て進まず。先生、乃ち商舟を聯れ、結びて陣勢を爲し、旗を掲げ鼓を鳴らし、趨

り勢ふ状のことくす。賊乃ち岸に羅拜し、呼んで曰く、饑荒の流民、賑濟を乞ひ求むと、先生、岸に泊し、人をして之れに諭さしめて曰く、懸に至りて後ち、即ち官を遣して撫綏し、各々生計を安んせん。非爲に自ら戡滅を取ることなかれと、賊懼れて散じ歸る。懸に至るや、府を開きて二匣を行臺の前に置いて曰く、民情を通ずるを求め、已れが過を聞くを願ふと。

十家牌

是より先き懸の民、洞賊の耳目となり、官府の舉動未だ形はれざるに、賊に先づ聞こゆ。軍門の一志隸、奸尤も甚だし先生偵うて之れを知り、呼んで臥室に入れ、審さに利害を説きて之を訊ぬ。隸乃ち情を明かにして實を告ぐ。先生乃ち城中に十家牌の法を立つ。其の法たる、十家を編して一牌となし、各戸の籍貫、姓名、年齢、容貌、行業を開列し、日に一家を輪し、門に沿ひ牌を按じて審察し、苟くも疑うべきに遇へば、官に報じて審問し、或は隱匿するあれば十家を連坐せしむ。仍りて父老子弟に告諭し、務めて禮讓の風を興して、以て敦厚の俗を成す。始め、此處に到るとき、道にして漳寇の方に熾なるを聞きしかば、兵を進めて長富村等

の賊集三十餘ヶ所を破り、水竹、大重坑等の賊集十三ヶ所を破る斬首七千餘、賊黨及び輜重等を俘獲すること算なく、諸洞蕩滅す。是の役僅に三月、漳南數千年の逋寇悉く平ぐ。此の歳九月、改めて南懸、汀漳等の軍務を提督するを授け、旗牌を給はり、便宜事を行ふを得たり。

三洲之賊

同十三年正月、三洲を征す。薛侃に與ふる書に曰く、「即日己に龍南に抵り、明日巢に入る。四路皆期の如く并び進む。賊必ず破るの勢あり。向きに横水に在り、嘗て書を仕徳に寄せて云ふ。山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し。區々として鼠竊を翦除するは、何ぞ異とす。るに足らん。若し諸賢、心腸の寇を掃蕩して、以て廓清するは、功を收むれば、此れ誠に大丈夫の不世の偉績なり。數日來、まことに己に必勝の策を得て、捷を奏すること期あり。何の喜びか之に如かん」と。二月朔を以て疏して、致仕を乞へども許されず。已にして又大帽洲頭の諸寇を平げ、地理の險易を視、縣を立て隘を置き、兵を留めて防守して歸る。四月、社學を立つ。曾て謂へらく、民風の善からざるは、教化未だ明かならざるに由る。今幸に盜賊稍々平らぎ、民困漸く息ふ。風を移し俗を

易ふるの事、姑らく其の淺近にして、行ひやすき者に就きて以て開導せば、訓誨即ち行はれむと、告諭するに、南懸屬する所の各縣の父老子弟を發し、互に相戒勉せよと、因りて社學を興立し、師を延き子を教へ詩を歌ひ禮を習ひ、街衢に出入するに、官長至れば、俱に叉手拱立せしめ、各先生時々之を賛賞訓誘す。之れを久しうして市民も亦た冠服を知り、朝夕歌聲委巷に達し、雍々然として漸く禮讓の俗を成せり。此年六月、都察院の右副都御史に陞り、子は錦衣衛に補せられ、世々百戸の祿を襲がしめらる。先生之れを辭免すれども允されず。

宸濠之亂

同十四年六月、敕を奉じて、福建の叛軍を勘處せんとし、十五日豐城に至る。宸濠の反せるを聞き、遂に吉安に返り、義兵を起す。十九日疏して變を上ぐる。宸濠は江西に在りて、寧王と稱し、深沈にして大略あり。異志を懷きて、多く無賴を聚め、兵を備へ隙を窺うて、發せんとき、朝廷政を失し、劉瑾の黨尙ほ威柄を恣にす。濠多く金帛を散じて、其の黨與に結び、姦謀譎策到らざるなし。朝廷漸く之れを知り、兵備を備めて戒嚴す。濠是に於てか意を決して遂に叛く。其衆凡そ六七萬、勢甚

だ猖獗なり。先生乃ち兵をひきぬ、吉安を發して大に樟樹に會す。遂に市汊にやどりて南昌を抜き、兵を促して濠を追ふ。黄家渡、人字腦等に接戦し、濠を撫舎に獲、江西の亂平ぐ。其の宸濠と戦へるとき城に入りて日に士友に對し、學を論じて輟まず、謀者走りて前軍の利を失うを報す。坐中皆怖色あり。先生出で、謀者を見、退きて坐に就き、前言をつぎて神色自若たり、之を頃くして、謀者走りて報す。賊兵大に潰ゆと、坐中皆喜色あり。先生出で、謀者を見、退いて坐に就き、復た前言をつぎて神色亦自若たりしと云ふ。

致良知之教

同十五年正月、先生時に四十九歳、召に赴きて、蕪湖にやどり尋ぎて旨を得、江西に返る。其の召に赴きて、上新河に至るや、朝廷諸幸臣の爲めに、讒阻せられて見ゆるを得ず、中夜默坐して、水波の岸を拍ち、泪々として聲あるを見、思うて曰く、一身を以て謗りを蒙り、死せんとせば即ち死せんのみ。老親を如何にせんと、門人に謂つて曰く、「此の時若し一孔の以て、父を竊みて逃るべきあらば、吾亦た終身長く往くとも悔えじ」と。是より先き、宸濠名士と攪結して、己れを助け、凡そ江右に仕ふものには、

多く禮遇交際を隆にす。武陵の冀元亨、曾て先生の爲めに使せるとき、濠と學を論ず。濠大に笑うて曰く、人の痴なる乃ち此に至る耶と、立るに謝絶す。然に返り故に及ぶを述ぶ。先生曰く、禍茲に在らむと、乃ち之れを護衛して問道より歸らしむ。讒奸等先生の聲を索むれとも得ず。遂に元亨に及び備さに考掠す。是に於て科道交々疏して論辯し。先生も備さに部院に咨へ、其の冤を白す。世宗の登極するや、詔して將さに釋さんとす。前に已に不幸病を得て、後五日にして獄に卒す。同門陸澄、應典の輩棺斂を備ふ。先生訃を聞き神位を爲くりて之れを慟哭し、又た其の家を恤む。同十六年始めて致良知の教を掲ぐ。

新建伯

此の歳、南京の兵部尙書に陞り、機務を參贊せしめらる。同十六年十二月、新建伯に封せらる。制に曰く、「江西の反賊勦平して地方安定し、各該の官員功蹟顯著なり。爾が部裏、既に官を會し議を集め、等弟を分別すること明白なり。王守仁を新建伯奉天翊衛推誠宜力守正文臣特進光祿大夫柱國に封し、還た南京の兵部尙書を兼ね、舊に照して機務を參贊せしめ、歳支祿米一千石、三代妻を并せて一體追封し、誥券を給與し、子



ふ。青龍舖と、明日周積を召す。積至りて之を俟つこと良久しうす。先生目を開きて視て曰く、吾れ去らんと、積泣下して、遺言を問ふ。先生笑うて曰く、「此の心光明復た何をか言はん」と。少頃にして、瞑目して逝く。時に二十九日、年を享くる五十七歳。

初め先生の發するとき、門人王大用、其起つべからざるを察し、豫め棺用に供すべき美材を備うて舟に隨ふ。是に至りて、門人張思聰親から匠事を教め、迎へて南野驛に入り、沐浴衾歛禮の如くし、復た舟に登る。士民の哭聲地に振ふ。懸に至り、南昌に至るころ、途に沿ふて擁哭するもの皆かくの如し。八年二月、越の家に至る。子弟門人等柩を中堂に奉じて遂に喪紀を飾る。家人、親族、子弟、門人等哭禮奠設儀の如くす。毎日門人の來り吊するもの百餘人、葬を率はるまで歸らざるものあり。皆其の生時に事ふるが如し。十一月、洪溪に葬むる。是の月十一日、會葬するもの千餘人。麻衣衰履、柩を扶けて哭し。又た四方來り觀るもの涕を交へざるはなし。洪溪は越城を去ること三十里、蘭亭に入ること五里。先生の親から擇ぶ所也。門人李琪等築活更番して晝夜息まざること月餘にして墓成る。御史聶豹もと門人たらず。訃を聞きて

後ち、吊奠を遣して亦た門人と稱す。蓋し先生の訓を佩し。中心悦びて誠に之れに服せるなり。後ち十二年、浙江巡按御史周汝貞亦た先生の門人なり。爲めに詞を陽明書院の樓前に建て、扁して陽明先生詞と曰ふ。各處の書院、俱に先生の牌位を立て、朝夕瞻禮して仲尼に比す。

衆美兼濟

躬○行○腐○儒○學○究○徒○ら○に○性○命○の○理○を○談○じ○危○微○精○一○の○說○を○稱○し○て○絶○え○て○實○踐○  
と○な○し○直○に○孔○孟○の○心○法○を○誦○き○後○人○進○修○の○路○を○開○き○一○生○の○行○事○横○來○豎○  
去○心○の○欲○を○掃○蕩○し○所○に○從○ひ○亂○を○定○め○紛○を○解○き○績○を○開○き○一○生○の○行○事○横○來○豎○  
知○り○揮○る○所○に○從○ひ○亂○を○定○め○紛○を○解○き○績○を○開○き○一○生○の○行○事○横○來○豎○  
千○古○輝○き○餘○訓○に○萬○世○に○流○る○時○に○違○は○ず○文○武○唯○だ○其○れ○用○ぬ○る○と○こ○ろ○  
願○ふ○に○世○の○先○生○之○れ○遂○に○道○徳○に○巧○妙○は○曠○世○の○偉○人○  
蘇○の○外○に○於○て○別○ぞ○能○く○此○の○如○き○を○得○む○百○世○の○宗○た○る○は○曠○世○の○偉○人○  
歐○の○外○に○於○て○別○ぞ○能○く○此○の○如○き○を○得○む○百○世○の○宗○た○る○は○曠○世○の○偉○人○



年甫めて十二、藩校興讓館に入り、勵精刻苦、經史を研鑽す。曾て學友と春秋左傳を師前に講じ、討論稍や劣る。君深く之を慚ぢ、家に歸るや、燈影睡を催せば、或は面に冷水を灑ぎ、或は辛味を口に含み、以て之を驅る。而かも猶ほ堪へざれば、一木棍を以て、自ら其の頭上を連撃し、滿頭殆と痛を生ずるに至り、一晝夜にして、左傳を通讀す。

年十八九、日夜孜孜、古聖賢の道を尋ね、深く朱子を信じ、起居常に之に擬し、最も四書近思錄を愛讀す。一日校より歸る。途風雨に逢ふ。右手十數卷の書を携へ、左手に傘を持つ、寒更らに堪ふべからず。乃ち書卷の雨に濡れんことを恐れ、一意之れを蔽ひ、冷酒の鼻端に滴れども、尙ほ拭ふ能はず。其の滴るに委して平然として歩み去る。道略相見て之れを笑ひ。家人もまた嘲る。君乃ち嘆じて曰く、聖人の遺書を讀み、賢人の遺跡を慕ふは、固より身を立て道を行ひ、以て百世の師たらんがため也。吾今朱子の學を奉ずること、此に年あり。坐作進退、之に模する。この如し。而かも以て一家の模範たる能はず。徒らに嘲笑を受くる。斯の如し。何ぞ百世の師表たるを得べけんや。是れ余が徧見淺識にし。朱學を妄信せるの致す所也。是より諸子百家の書を讀み、以て識見

を廣くし、大道を看破せんと、因りて老莊申韓より、下りて陸王の書に至るまで、涉獵し盡さざるなし。而して最も餘姚致良知の簡明直截なるを喜び、遂に深く之れを宗とするに至る。

當時米澤藩、其の學宗とする所は、専ら朱子學に在り。他は異端を以て之れを目し、痛く擯斥す。君の衆論を排して陽明の學を修むるや。皆之れを勝り、終に交りを絶つに至る。而れども毫も之を顧みず。平然として、其偏見を笑うて曰く、大丈夫自から守る所を知らず。何ぞ一先賢の糟粕を嘗め、偏見狹識、區々たる一村學究に老死すべけんや。憾むらくは、一郷に、我が師とすに足るものなしと、是より門を閉ぢて出でず。獨り一室に危座して、讀書これつとむ。

玉簪金衣

君、妻を同藩士丸山某に娶る。才色雙美、人目して好配と稱す。君甚だ之を愛す。嫁して幾日、妻、君が衾を與にせざるを憂ふ、而かれども蓋ちて之を言はず、荏苒日を送る。一夜意を決して君に謂つて曰く、妾の愚、固より良人が箕箒を取るに足らず。而も何の縁か、父母許して君に



配せしむ。妾の喜び何物か之に譬へむ。爾來唯良人の意に背かざらんことを之れ恐る。而かるに良人猶ほ未だ心を妾に許さざるが如し。良人願くは其の意のある所を示せと、説き了りて暗涙潸然として膝を濕ほし、梨花一枝春に雨を帯ぶ。

君之を聞きて愁然良久しうして曰く、人、木石に非ず。余れ亦苟ぞ情を解せざるものならんや。唯卿に望む所あり。卿到底之を諾する能はざるべし。妾として夫の意に従ふ能はざるものは、夫妻反目の基にして階老の契を結ぶを得ずと、嘖嘖復た言ふあたはざるものゝ如し。妾切に其望む所を問ふ。是に於て君曰く、余が望む所は、最も言ふに苦しむ所のもの也。抑も卿の家は、豪富一藩に冠たるは、人の能く知る所、卿の嫁するや、玉簪金衣、數十の筐に充つ。是れ殆ど中人十家の産に當らむ。而かれども余は敢て此等の財寶を望まず。余が年來家財を擲ちて、以て購ふ所の諸子百家の書、殆ど積みて推を爲せり。然れども未だ以て余が眼界を廣うし、胸中を養ふに足らず。卿願くは彼の粧飾一切を以て典籍に換へることを得ざるが、余が望む所は即ち是れ也。然らば則ち卿が細事に區々せざるの志操を知り、一は余が宿企を贊助する

の一莫逆たり。然れども婦人の情之を忍ぶべからず。又卿の實家に於ても之を背ぜざらむ。故に黙して今日に至りし也。妻聽きて大に悦び、其の玉簪金衣を鬻ぎて、百家の書を購ふの用に供す。

五鼎之食

慶應元年、君、年二十二、江戸警衛の命を帯びて江戸に出で、同年七月、安井息軒の門に入る。息軒其の才學を奇とし、擢じて舎長となす。二年四月、郷に歸る。門を杜ちて日に書を讀み、又好みて兵法を講ず。其の間、厭書を執政に上りて時務を論ず。三年藩命を以て京都に出で、廣く四方の士と交る。此時海内麻の如くに亂れ、徳川將軍、政權を奉還し、翌年正月、鳥羽伏見の變あり。次ぎて會津征討の軍起る。四月君選ばれて、貢士となり、薩長の徒、漫に幕府を處置し、會桑二藩を誣ゆるを見て、再三建言する所あり。用ゐられず。東征の師、既に奥羽に向ふ。君、慷慨憤懣、謂へらく、彼れ私憤を洩し、私利を圖り、以て大政を弄す。其の意蓋し己れ禍權を握らんとするにあり。是れ幕府を除きて又幕府を造る也。然らば則ち徳川氏を改造し、會桑二藩の冤を雪ぎ、以て極力

之○を○排○撃○せ○さ○る○べ○か○ら○す○。男○兒○生○き○て○五○鼎○を○食○せ○す○ん○ば○死○し○て○五○鼎○  
に○烹○ら○れ○ん○の○み○と○。同○年○五○月○決○然○袂○を○振○う○て○京○都○を○去○る○。時○に○年○二○  
十○四○。客○舎○の○壁○に○題○せ○る○詩○に○曰○ふ○。

欲○成○此○志○豈○思○躬○  
醉○撫○腰○刀○還○冷○笑○

埋○骨○青○山○碧○海○中○  
決○然○躍○馬○向○關○東○

討薩之檄

時に奥羽の地、戰塵天に漲り、戎馬到る處に馳逐す。君乃ち越後北條  
に至り米澤藩兵の參謀甘糟某に語りて曰く、西軍の中、最も威力あるも  
のは、薩長の兵也。我曹事を天下に爲さんには、先づ此大本を摧かざる  
べからず。大本を摧くには此兩藩を分離せざるべからずと、替て相交  
れる時山某の長軍を監せるに書を與へ、又討薩檄を草して之を敵軍に  
送る。

初め薩賊の幕府と相軋るや。外國と和親開港するを以て、其の罪と  
なし、己れ専ら尊王攘夷の説を主張し、遂に之を假つて、天眷を僥倖す。  
天幕の間、之が爲めに紛紜内訌。列藩動搖、兵亂相踵す。然るに己れ

朝政を專斷するを得るに至つて、醜然局を變じ、百方外國に誦諛し、遂  
に英佛の公使をして、紫震に參朝せしむるに至る。先○日○は○公○使○の○相○  
城○に○入○る○を○惡○み○今○日○は○公○使○の○禁○闕○を○登○る○を○説○く○。何○ぞ○其○れ○公○使○の○後○相○  
反○す○る○や○。是○に○由○つ○て○之○を○觀○れ○ば○其○拾○有○餘○年○尊○王○攘○夷○を○主○張○せ○し○  
衷○情○は○只○幕○府○を○傾○け○邪○謀○を○濟○さん○と○欲○す○る○に○在○る○こ○と○、照○照○知○る○べ○  
し○。薩賊多年譎詐百端上は天幕を暴蔑し、下は列侯を欺罔し、内は百  
姓の怨嗟を致し、外は萬國の笑侮を取る其の罪何ぞ問はざざるを得ん  
や。皇朝凌夷極まる雖ども、其の處置損益知るべき也。然るに薩  
賊專權己來、猥りに大活眼大活法と號して、蕩然地を掃ふに至らしむ。  
して、朝變幕革、遂に皇國の制度、典章をして、蕩然地に掃ふに至らしむ。  
其の罪何ぞ問はざるを得んや。薩賊專權己來、擅りに攝家華族を擯  
斥し、皇族公卿を奴隸視し、猥りに列藩郡不逞の徒、己に阿附する者を  
拔擢し、是を公卿として、青を紆ひ、紫を施し、罪何ぞ問はざるを得んや。  
と、今日より太しきばなし、其の罪何ぞ問はざるを得んや。伏見の  
事私闘私戰と執曲執直かを知るべからず。苟も王者の師を起さんと  
と欲せば、須らく天下と共に、其の公議を定め、罪案を決して、然る後徐





活○眼○を○開○いて○之○を○研○究○せ○ざる○べ○から○す○彼○の○所○謂○俗○學○腐○儒○の○徒○は○徒○に○勉○む○故○に○見○識○卑○陋○狹○小○に○あ○ら○ざ○る○べ○し○美○醜○も○に○之○れ○を○學○ば○ん○と○考○へ○聖○旨○に○察○る○機○務○を○知○る○べ○し○迂○淺○に○あ○ら○ざ○る○勿○れ○世○用○に○益○

天門狹窄

明治二年二月、君名を遊學に托して京に上り、集議院寄宿生となる。既にして衆論囂然として曰く、此れ賊首なりと、君立論卓勳、常に同僚を屈す。爲に愈憎惡を受け、遂に退院を命ぜらる。君慨然として詩を賦し、之を院壁に題し、衣を拂うて去る。詩に曰く、

天門之窄窄於我、不容射鉤一管仲。躑躅無恙舊鱗鱗、生還江湖真一夢。每經一艱一倍來、唯須痛飲醉自寬。埋骨之山到處翠、命垂道窮何足怪。

時に天下の權勢全く薩長に傾き、諸藩唯々其の後へに従ふのみ。君憤激抑ふる能はず、曰く『聖帝上に在り。德澤雨露の如く、一視同仁、率土皆王臣也。彼れ薩長何物ぞ。戰勝の威を挾みて其の私慾を恣にし。已れに阿諛するものを擧げ、正義公道の士を疎んじ、黨同異伐す。今に及びて此勢滔を挫き、此類勢を挽回するにあらずんば、其の底止する所、測るべからざるものあらん』と、同志と共に時事を痛論し、大に爲すあらんとす。

陰謀

君、遂に同志を糾合して、兵を擧げんと欲し、上書して諸藩脱籍反側の徒を鎮撫し、各自ら歸順せしめんことを乞ふ。允されず。會幕府の士、三枝采女之助、偽裝して僧となり、淨月坊と稱するもの來り語りて曰く、『余の横濱に在るや、阪の間、物論囂然、亂將に起らむとす』と。龍雄大に喜び、乃ち淨月坊をして京阪に赴き、西國の情形を偵視せしむ。明年春正月、淨月坊京攝より歸りて曰く、『九州の地は物情恟々として亂を思ひ。長州も内訌將に起らんとす』と、且つ説くに同志十數人を得たるを以てす。君躍然として曰く、『時機至れり。失ふべからず』と、乃ち歸順部曲點

檢所の七字を白木の表に大書し、東京芝二本榎の上行寺、圓心寺兩所の門前に樹て、同志を集む。原直鐵以下來り會するもの四十餘人、奥羽諸藩士も亦遙に之に應ず。

君、乃ち部將を會して地圖を披き、名簿を按じて部署を定め、以て軍機を盡す。奥羽諸州は北村正機、東海道は三木勝、野州日光山は原直鐵、同庚中山は大忍坊、甲州府中は城野至と、其の部將を定め、各兵を沿道に募り、一時に蜂起して京都を衝き、而して君は二本榎の牙兵を率ゐて、臨機進軍、直に大城に迫り、在朝の高等官を芟除して、封建の舊制に復せんとを期す。諸策既に成り、部將各東京を發す。

漢廷高枕

是れより先き官府竊かに君の情欺を探ぐり、偵察太だ嚴也。是に於て遂に米澤藩に命じて其の邸内に禁愼せしめ。三年五月米澤に押送せしむ。其の從増岡某之を途に奪はんとす。同士諭して止む。君、東京を發する時、本田某に示せる詩に曰ふ。  
俠骨至今猶未摧。 任他刀鋸迫身來。  
漢廷從是知高枕。

寂寞、世間、無、郭、隗。

木月、大久保の諸公もと深く君を怖る。君亦既に之を知る。轉結二句故に及ぶ。世間復た郭隗のあるなし。漢廷の枕を高うする想ふべし。君、既に米澤に還る。日夜憤懣措かず。潜に書を作りて同志に贈り、再び兵を擧げんことを約す。既にして其徒捕へられて陰謀を洩らすものあり。君是れより深く鋒銑を歛め、敢て復た世事を談せず吟哦以て其の僻を遣る。此年八月米澤藩をして更に君を東京に護送せしむ。君時に病に罹りて褥に臥す。故舊頻りに其の上京猶豫を勸む。君笑うて曰く「死生命あり。諸君請ふ止むる勿れ」と書類數筐を馬背にし、原野に送りて之を焼き、遂に米澤を發す。途、刀根川を渡る時、一詩を賦して感慨を述ぶ。詩に曰ふ。

欲○回○狂○瀾○濟○一○世○道○之○窮○通○未○肯○計○  
滿○眼○紳○蔽○是○芥○蒂○天○日○不○照○孤○臣○心○  
欲○死○則○死○生○則○生○我○肘○容○易○使○人○掣○  
目○擊○湖○山○淚○沾○袂○同○首○遭○逢○夢○耶○真○  
嗚○呼○縱○令○此○山○如○螭○此○河○如○帶○區○區○之○志○安○能○替○  
壯○圖○只○有○水○東○逝○

最後

君、東京に着し、傳馬坊の獄舎に繋かれ、鞭笞水火、身殆と完膚なきに至る。而かれども敢て同盟の名を言はず。唯曰ふ、「一死國に殉するのみ」と、故を以て刑を受くるもの數人に止まるといふ。十二月二十八日、小塚原の刑場に梟せらる。時に年二十有七。其の刑に臨むや、神色自若として、毫も平生に異ならず。左右を睥睨して曰く、「噫、余が策をして成すべし。しめば、政體更むべく、奸臣斬るべく、幕府の冤雪ぐべく、藩祖の業興すべし。而して今や皆已む矣。豈に天にあらずや」と。當時、君を斬りたる首切初右衛門の實話に曰ふ。

手前が十七歳の時です。明治三年庚午歲師走の二十八日、江戸市中は節季で、貸餅が盛んに搗かれ、藥研堀の年の市といふに、今日は米澤の藩士、雲井龍雄を斬れといふので、小傳馬町の囚獄に參りましたが、音に響いた浪士でありますし、斬損つたとあつては大變だと、おのづとあたり前の囚徒を斬るのは自分の覺悟も違つて居ました。申す迄もありませぬが、安井息軒の門下で、一夜に左氏傳を讀み終はつた

と云ふ英雄の時あらす囚れの身となつて、その春に米澤に押送されまして、八月に江戸へ檻送されました。御取調べも嚴重で、同志の面々を自状させようと思いましたが、幾ら拷問に逢つても一向屈服しない。當時の事ですから、芝居で演る様な残酷な目に逢はしたであらうが、連判帳は焼棄してあるから、一死國に殉するといつて平氣であつた。雲井氏は、至つて小柄で、大膽などは何處に宿つてゐるか分らない男でした。この人物が雲井龍雄といつて、兎に角天下に名を轟かした人かと、呆れた位でありました。が、今や刑場の露、外の霜と消えり、刹那に、神色自若として、控へて居た有様は、今に敬服の外ありませぬ。以て其の膽大氣壯を知るべし。

詩歌

界灣夜泊

環。零。瀛。得。飽。江。山。泊。通。東。寧。四。十。灣。許。國。壯。心。丹。一。掬。寄。身。秋。水。碧。雙。環。功。名。蟹。雨。蠻。烟。外。踪。跡。鈴。聲。帆。影。間。猶。有。菰。蒲。蓬。底。夢。依稀。自。向。故。園。還。

遠州遭厄解悶

七雄猶未決雌雄。羽檄紛紛西又東。半歲干戈鄉信絕。長程風雨客途窮。縱橫自比蘇張亞。來往常遊秦趙中。生不補時何若死。唯須努力立奇功。

相馬城別人見子勝

平方海。勿來關。石路蔡廻廢洞間。怒濤如雷噴雪起。淘去淘來海噬山。地形雄偉冠東奧。一戰守此誰能攀。君航東洋來此地。目擊區處防海事。難奈秦兵威不振。風聲鶴唳肝膽墜。君尙叱咤突賊陣。指揮死士彈且刺。彼衆我寡勢不便。咽喉之地忽然棄。君不見大梁舉兵救趙來。函谷之關可擊摧。縱令此地棄不守。雪恥有期君休哀。我亦潛行徇兩毛。親都將刺二。茲魁義兵一時起。背掩擊之亦快哉。宿悶金風嫺。吹覺水。任此。事不致。遜。今日別君自愛。唯須詩酒遣。好携東山妓。嬌紅欲滴情無力。恰似楊妃浴後色。花容如愁何所愁。吾對花間花默。

雨中觀海棠

憶昔殿殿南莊。把酒賦詩賞海棠。當時同盟今四散。或爲魯連或張良。不將水火挫其志。往々暴恣就死地。死者國首送賊廷。生者海島尙唱義。嗟吾赤城僅脫身。再舉無策久逡巡。今對此花思往事。血淚和雨紅濕巾。

透谷寓居即事二首

撲面紅塵豈浼予。人間到處有髑廬。誰知孤劍青矜子。歌吹海中閑讀。與俗浮沈醉又醒。我心如水跡如萍。閑々更以掣鯨手。挿出寒梅花一。

遣悶

縱令不有拔山力。男兒寧無椎秦寔。傷時憤俗非好事。丹心元欲報皇國。皇國英風尙未墜。醜虜何敢許縱恣。天津之鑑素非遠。城下之誓古所恥。君不見大和時昔全盛時。雄氣赫赫威四夷。思之撫劍空傳勃。霜寒羽陽城外月。君の詩世に存するもの頗る多し。以上たゞ其の最も人口に膾炙するもの二三を擧げて、以て才藻の一斑を示せるのみ。篇々幽憂悵厲、



懺 懺 悲 痛、以て 山石を 裂き、而して 海水を 立たしむるに 足る。 夫れ 君  
 の 抱 負 既 に 前 述 の 如 し。 區々 彫 蟲 の 技 の 如 き は 固 より 道 不 に 足  
 ら ざ る 也。 然 れ ど も 詩 は 心 聲 な り。 其 の 氣 盛 な れ ば、 固 ち 其 の 言 闕 に、  
 其 の 思 沈 め ば、 則 ち 其 の 旨 遠 し。 南 船 北 馬、 百 方 畫 策 の 間、 觸 緒 榮 懷、 輒  
 ち 題 詠 あ る も、 未 だ 必 し も 稱 り て、 以 て 其 の 蘊 蓄 す る 所 を 見 る に、 足  
 ら ず、 人 ば、 あ る ざ る 也。 必 し も 稱 り て、 以 て 其 の 蘊 蓄 す る 所 を 見 る に、 足  
 く、 ら、 ず、 人 ば、 あ る ざ る 也。 必 し も 稱 り て、 以 て 其 の 蘊 蓄 す る 所 を 見 る に、 足  
 い、 の、 ら、 ず、 人 ば、 あ る ざ る 也。 必 し も 稱 り て、 以 て 其 の 蘊 蓄 す る 所 を 見 る に、 足  
 好、 き、 の、 ち、 お、 夜、 ば、 あ、 る、 ざ、 る、 也。 必 し も 稱 り て、 以 て 其 の 蘊 蓄 す る 所 を 見 る に、 足  
 月、 に、 お、 し、 鳥、 の、 つ、 が、 い、 可、 は、 し、 ば、 し、 離、 ひ、 ま、 す、 の、 君、 切、 ら、 む、 心、 は、  
 雪、 と、 梅、 が、 蕭、 か、 蕭、 ほ、 梅、 し、 た、 君、 の、 寢、 覺、 め、 の、 旅、 衣、 褰、 げ、 て、 い、 ぞ、 こ  
 眞、 の、 や、 み、 月、 の、 蕭、 か、 蕭、 ほ、 梅、 し、 た、 君、 の、 寢、 覺、 め、 の、 旅、 衣、 褰、 げ、 て、 い、 ぞ、 こ  
 播、 磨、 湯、 歸、 る、 船、 の、 路、 に、 か、 啼、 り、 故、 郷、 と、 春、 夫、 れ、 寇、 萊、 公、 は、 宋、 代、 の、 名、 相、 な、 り、 而、 し、  
 望、 む、 花、 洛、 の、 空、 か、 故、 郷、 と、 春、 夫、 れ、 寇、 萊、 公、 は、 宋、 代、 の、 名、 相、 な、 り、 而、 し、  
 懐、 惋、 む、 緜、 綿、 情、 詞、 に、 餘、 と、 疑、 は、 る、 春、 夫、 れ、 寇、 萊、 公、 は、 宋、 代、 の、 名、 相、 な、 り、 而、 し、  
 の、 作、 に、 あ、 ら、 ざ、 る、 か、 と、 疑、 は、 る、 春、 夫、 れ、 寇、 萊、 公、 は、 宋、 代、 の、 名、 相、 な、 り、 而、 し、

其、て、  
 の、胡、  
 人、仔、  
 と、尊、  
 爲、て、  
 り、其、  
 に、の、  
 似、詩、  
 す、を、  
 と、評、  
 君、し、  
 の、て、  
 歌、曰、  
 に、く、  
 於、思、  
 て、を、  
 も、含、  
 亦、み、  
 然、て、  
 り、悽、  
 婉、音、  
 情、に、  
 富、む、  
 殊、に、

龍雄雲井君之墓表

所以取於天下奇傑之士者。以其心事磊落。雄偉不群。能爲常人之所不能爲。而其成敗利鈍。固在所不問也。北羽有一士曰龍雄雲井君。實奇傑之士也。君本姓中島。諱守善。出嗣小島氏。有故稱。今姓名。父曰總右衛門。母屋代氏。米澤藩士也。君幼有至性能事父母。父嘗以君容止異常爲憂。君知之。悔恨不措。自是痛自折節。慎舉止。以安父心。一鄉奇之。居常力學。方夜讀書。思眠。或以冷水灑面。或舍辛味以驅之。猶

尙不堪。乃製一木棍。自連擊頭上。殆至滿頭生瘤。嘗  
 讀左氏傳。一夕而竟。其勉勵如此。後博綜群書。最通  
 王氏之學。君爲人。倭身廣額。狀貌如婦人。而天資沈  
 毅。偶儻有大志。有不食五鼎。被五鼎烹之氣慨。明治  
 戊辰。以徵士入京師。人見其狀貌。皆輕之。及議時事。  
 則俊辯風生。卓論風發。常屈座人。人始知其奇傑之  
 士也。名聲漸著。聞奧羽諸藩。舉兵抗官軍。曰是男兒  
 致身之秋也。星奔歸國。有所畫策。歷說旁近諸藩。欲  
 以建合從之籌。周旋其力。然以時機已去。而不及海

內一定之後。應撰入集議院。屢陳天下之大計。不爲  
 時論所容。竟見斥。君既不得意。銳氣鬱勃於中。而無  
 所伸。一皆發之詩歌文章。悲壯淋漓。憤慨之氣。溢於  
 毫端。已而坐事蒙譴。幽於其國。自是深歛鋒鋞。不敢  
 復談世事。吟咏自娛。然亦竟不免嫌疑。檻致東京。遂  
 被刑。時年二十有七。權厝於骨原。實明治庚午十二  
 月二十八日也。嗚呼君之於世。可謂以奇終始者。始  
 也。畫奇策而不遂焉。中以奇論而不遇於時。卒之遇  
 奇禍而死。何其數奇哉。雖然君之所以爲天下奇傑

之士者以此爾。則人見之以為奇者。在君蓋以為常也。又何足深痛焉。君初娶丸山某女。無子。故無弔祭者。今茲五月。宇加地某。鑑某等。念舊誼。乃相議。改葬於谷中天王子。建碑以表其墓。請文於余。余嘗與君相識。故悉其行事。然其詳。今有不可得而言者。則聊書其硬槩。俾勒諸石。

明治十四年辛巳五月 東京 鴻雪爪隸額

靜岡 人見寧撰文

清北平 張滋昉書

明治四十三年十一月七日印刷  
明治四十三年十一月十一日發行

（錢五拾六金價定）

著作權所有

發兌元

著者	杉原幸
發行者	東京市日本橋區上板町十番地 寺本安之助
發行者	東京市京橋區月町二十四番地 杉本要
印刷者	東京市京橋區月町二十四番地 金子久太郎
印刷所	東京市日本橋區上板町十番地 三協印刷株式會社
代售	東京市日本橋區上板町十番地 田書房
代售	大阪市東區北道渡邊町八十九番屋敷 振替貯金口座一八九〇番 杉本梁江堂
代售	大阪市東區北道渡邊町八十九番屋敷 振替貯金口座東區二八二三番

千代田書房發行圖書略目

文學博士服部宇之吉先生序  
蘇峰學人德富猪一郎先生序  
松梁坂井末雄先生訓譯註釋

新譯  
古今名家文鈔

ポケット形金文字入  
箱入  
定價 金八拾五錢  
特價 金七拾錢

本書は古今の名家大家の集中より。其精華を摘載し。上欄には詳密なる字解を附し。欄内には。訓點句讀は勿論。總振假名にて。讀方と大意とを掲げたれば。初學者にても。一讀其文義を了解し。作文の素力を養成すると同時に。漢文學の智識を上進する。蓋し亦易易たらん乎。苟も學海に掉さすの諸彦は。必ず坐右缺くべからざる好著なりとす。請ふ速に一本を購求あれ。

從二位勳一等  
貴族院議員  
松岡康毅先生序  
國學院大學講師  
宮内鹿川先生解題  
岐  
溪百年先生著

# 易經詳解

紙數七百頁  
定價金壹圓  
郵税金八錢

ポケット形綴製ギルト附金文字入箱入

● 論語の一節「孔子曰我に數年を加易を學ばば以て大過  
● 孔子は易を以てト筮の書と寧ろ是を治道の大倫の  
根柢とせられたり」

上は治天下の大業より下は吾人が吉凶禍福進退存亡の理に至る迄盡く  
包羅せられざるなく伏羲氏以下四聖を経て完成せる最古の大寶典也歴  
代學匠の説實に枚擧に遑あらざるも其意義大深遠にして未だ平易通俗  
の書に乏し本書は訓譯解釋最も懇切にして平易なれば尙も易に志す者  
道に志す者共に好伴侶たるを信す希くは東洋無二の此寶經を手にして  
諸紳が處世に一曙光を得たまはんことを

賴山陽先生著 徳富蘇峰先生序  
太宰春臺先生著 坂井松梁先生譯

# 漢文讀書要訣

ポケット形金文字  
入天金附箱入美本  
全書冊  
定價金四十五錢  
郵税金六錢

太宰氏の經學賴氏の史學均しく是れ文壇の双壁たる天下已に定論あり  
此書は二氏の雜著より其英を抜き其華を取り之れに懇切なる訓譯注釋  
を施し一讀二氏の議論と抱負とを窺ふ事を得るのみならず漢文學全班  
の要旨に曉通することを得ん乞ふ愛讀を賜へ

歡 | 迎 | の | 讚 | 辭 | 雷 | の | 如 | し

伊藤銀月著

版四

# 秀吉と家康

全定價各冊  
二金六拾錢  
冊郵稅各六錢

建國三千年來最も興味深き彼の戰國時代の真相を詳説し、信長以下群雄割據の狀著者が健筆によりて縦横に批評せらる。本書を讀むもの身自ら戰國に人となるの感あらん。秋夜燈下の最良

好伴侶也

伊藤銀月著

版三

# 海舟と南洲

洋裝全一冊  
定價金六拾錢  
郵稅六錢

錦旗東征して函嶺に至るや海舟南洲の二人あり一夜一言一諾の下に江戸城明渡成る此二人者無かりせば我千代田城下八百八街は盡く官幕兩軍の戰場として應仁亂役の京都たりしや必せり海舟は隱捷して風月を友とし南洲は征韓を唱へて空しく城山の土となりぬ今や黒雲韓國に横り世人大西郷を想ふの時著者獨特の史眼を以て此二英雄の生涯を叙す筆端熱血溢るゝが如く熱淚紙上を沾するも亦故なしとせんや希くは一讀を玉へ



伊藤銀月著

再版 南朝と北朝

\*\*\*\*\*

洋裝全一冊  
金六拾錢  
郵稅六錢

「伊藤博文公」「海舟と南洲」を著はして本書に及べるは總括して、或る活ける宗教の經典を作るべき著者の微意なると共に、亦一面に於ては嚴密なる史實ならずとせず、重野安繹、久米邦武、谷本富、山路愛山等先輩學者諸氏と意見を異にし、國史研究に一生面を開く。

伊藤銀月著

彗星的人物

洋裝全一冊  
定價金六拾錢  
郵稅六錢

未曾有の大彗星は出現せり而も彗星と世の治亂との關係を信ずるは世界共通也著者此機を利用して日本の歴史より軌道を殊にせし異彩ある人物十數を撰びて之を評傳す其誰々なるかは讀者の推測に任ずと雖も就中平將門。明智光秀。大石良雄等を主題となせるものは千百の死史を一掃すべき奇創の觀察也

伊藤銀月著

版五

# 伊藤博文公

洋裝全一冊  
價金六拾錢  
郵稅六錢

コロタイプ版摺新聞半頁大肖像添附

明治中興第一の功臣伊藤博文公は實に世界的偉人なり。著者平生公の人物を研究して特殊の見識を有す。公が人物の真相。其如何にして成功したるか。何故に秀吉以後唯一なるか。國民は公に何を學ぶべきか。等は本書を見ずして知る能はず。乞ふ糊と剪刀との一時的粗製品と同視する勿れ

安部磯雄赤司繁太郎共著

版四

# 理想の青年

四六版 金四拾錢  
全一冊 郵稅四錢

如何なる時、如何なる所に於ても青年は社會の柱石たるべし青年を離れて凡て人生の事生氣なく、精神なし、青年の修養是に於てか一層の重きをなすべし。本書は安部、赤司兩先生が青年の精神修養の資にとて説ける所、一度本書を繙くもの嚴父に接し慈母に見るの感あらん。

本書に對する批評

(萬朝) 理想と青年、幸福ある生涯、生活の疑問、宗教の味、現代の要求と宗教等の題下に人生の根本問題を論じたるも、迷へる青年悲觀せる青年等は一讀すべし  
(讀賣新聞) 本書の上中は安部氏の筆に成り其下半は赤司氏の筆に成る兩者共に基督教の鼓吹者にして其現代青年の爲に

理想を説く稍や高きものなり願ふに今の青年は理想を求めて得ず宗教求めて得ず彷徨寄る所なきもの極めて多きが如し本書彼等の爲に一杯の水を興ふるだけの功なしとなさざるべし

(國民新聞) 青年に對する教訓として兩氏の物質界、精神界に亘りて講述せる物所説は穩健也

赤司繁太郎著

再版  
青年と人格

四六版 金四拾五錢  
全一冊 郵稅六錢

五千萬の我日本國民に人格の必要を説くは何人もせる處なるが殊に著者が最近數年間に或は宗教上道德上の見地より青年即ち第二の日本國民に人格の尊ぶべきことを極論し來りたるは世人の知る所にして本書は此等著者が青年の爲に其熱血を注ぎたる論文集にして現代の青年及青年を有する父兄及教導者及將來青年の配遇者たるべき淑女諸君及此等の淑女の父兄及教導者の座右一日も缺くべからざる青年人格論にして又恰好の一多聖典也敢て一讀を希ふ

赤司繁太郎著

人生の疑義

四六版三百五十頁  
定價金五拾錢  
郵稅金八錢

厭世、非乎、樂天、是乎、由來人生の事、解決に苦しむべき問題多し著者は最も大坦に、最も自由に、其獨特なる人生觀の上に立ちて、人生の暗黒方面に關する問題を、縱横無盡に論究せること恰かも快刀を以て亂麻を解くが如し、試みに其目次を誌せば左の如し

- 一、人生の疑義
- 二、惱める人に
- 三、病める人に
- 四、人生の不完全
- 五、事變災殃
- 六、道德的害惡
- 七、精神的疾患
- 八、死
- 九、神は愛なりや

思ひんと早く書くは—き作—の文の妙を極め—め達—の意の文に長—  
せんとすは—はに熟字—はに熟語—に通ぜざるかべら

文科大學教授文學博士 芳賀矢一先生序文  
竹南學人 森本樵作先生著

# 發音 實用新辭典

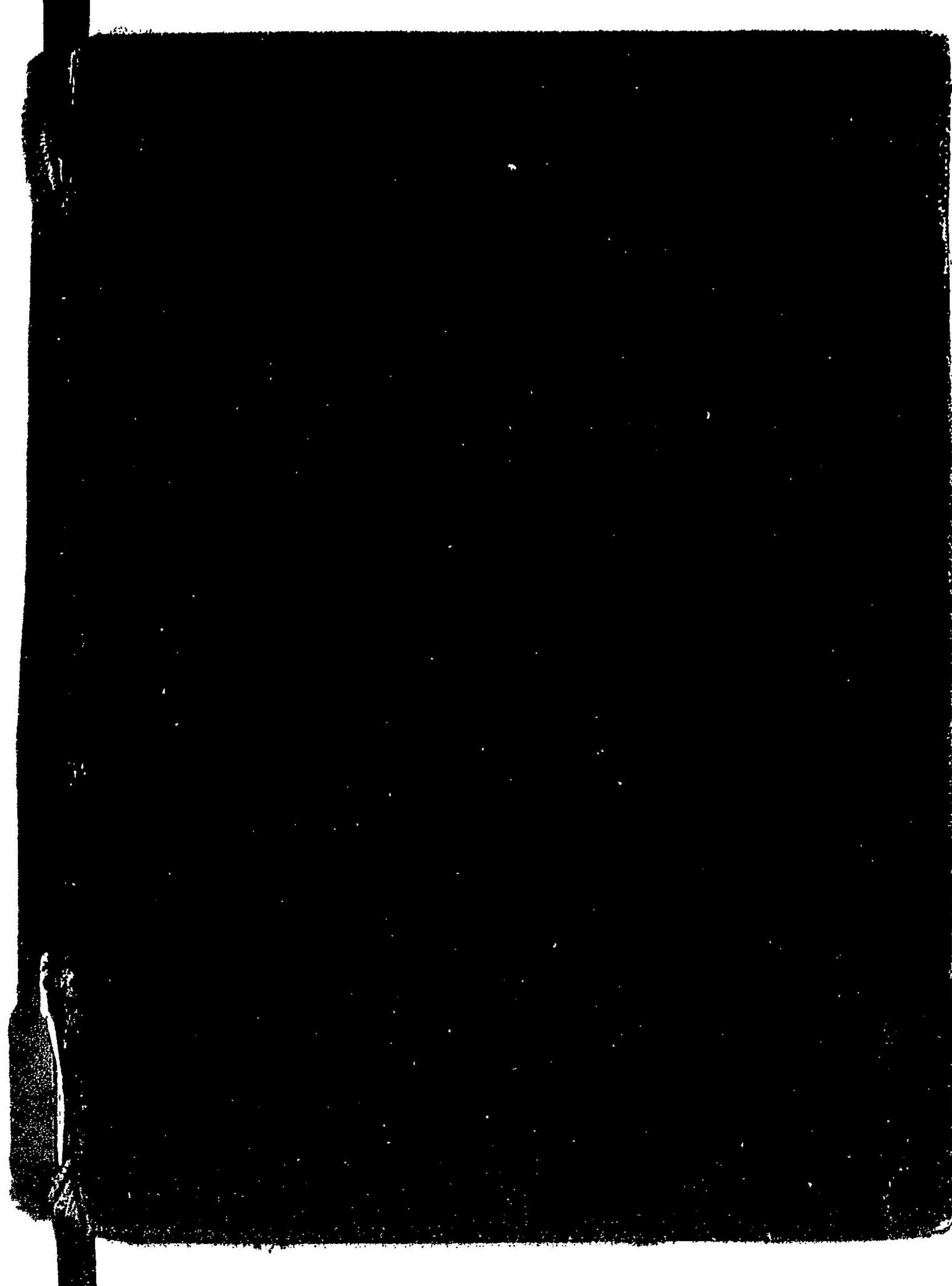
四六判四段組紙數一千百六十  
餘頁洋裝背皮金文字入特別上  
製定價金貳圓卅錢貳萬部  
限り特價壹圓五拾錢  
小包四百多迄

本書は社會の各階級を通じて最も必用なる普通語、熟語、俗語、専門語、新語及外國語にて日本の普通語となり居る語 例せば「シャツ」「シャボン」「ランプ」等凡そ日常使用せる有ゆる一切の語を網羅し是れをいろは順に依りて引出し得る至便の好辭書にして見出方の簡便なること例令へばいゝの部にて一言なれば(意。異。威。二言なれば)鳥賊。椅子。戌。稻。色(三言なれば)庵。鱒。威權)はの部六言なれば(爆發物)等の文字を直ちに見出し得る方法にて且又其文字の下に夫々解釋を附したれば何人も日常缺くべからざる寶典なり

熟字措を熟語にて他を多く集るにあらざらぬ。簡明に説明したる者本は

29  
353

2



29

353

Ⓜ

008298-000-4

29-353

伝習録

王 陽明/著

M43

AAC-0221



